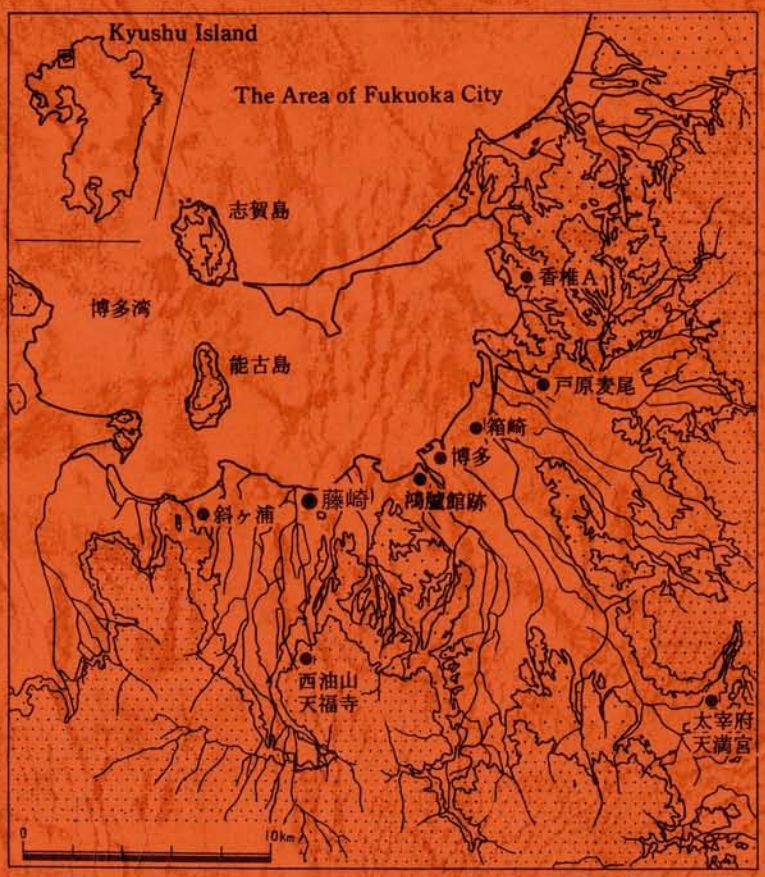
藤崎遺跡 14

——藤崎遺跡第28・29次調査——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第607集



押圧文瓦出土遺跡

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1999

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。福岡市の西部に広がる早良平野は、近年開発の増加が著しく、それらが次第に失われつつあります。

藤崎遺跡群は弥生時代の初めから連綿と集落が営まれ、早良平野のなかでも海に開かれた拠点的な集落として発展してきました。しかし、高速鉄道の開発以来、西の交通、生活の拠点として開発事業も増加し、発掘調査も増加の一途をたどっています。

本書は民間の共同住宅建設に伴い実施された藤崎遺跡群第28・29次調査の記録を報告するものです。調査では古墳時代から中世にいたる遺構・遺物が発見されました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

調査に際しましては地権者の神永智恵子様・中澤憲二様をはじめ、多くの方々のご協力を賜りました。

心より感謝の意を表する次第です。

平成11年3月31日
福岡市教育委員会
教育長 **町田英俊**

例　言

1　本書は福岡市教育委員会が早良区藤崎における共同住宅建設に伴い、発掘調査を実施した藤崎遺跡第28・29次の調査報告書である。

2　本書で報告した各調査の細目は以下の通りである。

次数	調査番号	遺跡略号	遺跡調査原因	所　在　地	調査面積	調査期間
28次	9701	FUA28	共同住宅建設	早良区高取2丁目313・314	121.30 m²	19970402～0418
29次	9719	FUA29	共同住宅建設	早良区藤崎1丁目2番7号	221.37 m²	19970609～0704

3　本書に掲載した遺構実測図の作成は調査担当者が行った。

4　本書に掲載した遺物実測図の作成は調査担当者が行った。

5　本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は調査担当者が行った。

6　本書に掲載した挿図の製図は調査担当者が行った。

7　本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。

8　遺構の呼称は竪穴住居跡をSC、掘立柱建物をSB、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、その他をSXと略号化した。

9　遺構・遺物番号は各調査次ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。

10　本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

11　本書の執筆は第28次調査を加藤、第29次調査を星野が行った。

12　本書の編集は加藤の協力を得て、星野が行った。

目　次

本文目次

Ⅰ 位置と環境……1

Ⅱ 第28次調査

はじめに

1．調査に至る経緯……5

2．調査組織……5

調査の記録

1．検出遺構……7

2．まとめ……12

Ⅲ 第29次調査

（1）はじめに……15

（2）調査の概要……16

（3）遺構と遺物……17

（4）まとめ……29

挿図目次

Fig. 1　藤崎遺跡位置図 ……1

Fig. 2　調査地点周辺の地形学図 ……2

Fig. 3　藤崎遺跡調査区 ……4

Fig. 4　第28次調査地点図（1/400）……5

Fig. 5　遺構配置図（1/100）……6

Fig. 6　柱穴出土遺物実測図（1/3）……7

Fig. 7　井戸実測図（1/60）……8

Fig. 8　井戸出土遺物実測図（1/3）……9

Fig. 9　溝出土遺物実測図（1/3）……10

Fig.10　その他の遺物（1/3, 1/2）……11

Fig.11　第29次調査地点図 ……15

Fig.12　第1面遺構配置図 ……16

Fig.13　第2面遺構配置図 ……17

Fig.14　SC02・SC02出土遺物・SB09実測図…18

Fig.15　SE01実測図 ……19

Fig.16　SE01出土遺物実測図 ……20

Fig.17　SD10・SD10出土遺物実測図……22

Fig.18　SD10出土瓦実測図 ……23

Fig.19　土坑出土遺物実測図 ……24

Fig.20　土坑実測図 ……25

Fig.21　包含層出土遺物実測図 ……28

図版目次

PL 1　（1）調査区北側全景（南から）　（2）調査区南側全景（南から）……13

PL 2　（1）SE—01掘削状況（東から）　（2）SE—02（南西から）……14

PL 3　（1）第1面南半分全景　（2）第1面北半分全景……30

PL 4　（1）第2面南半分全景　（2）第2面北半分全景　（3）SB09 ……31

PL 5　（1）SC02　（2）SC02遺物出土状況　（3）SD10 ……32

PL 6　（1）SE01立石出土状況　（2）SE01　（3）SE01井戸側出土状況 ……33

PL 7　（1）SK03　（2）SK06　（3）SK05

（4）SK08　（5）SK11　（6）SK11周辺遺物出土状況 ……34

PL 8　第29次調査遺物写真1 ……35

PL 9　第29次調査遺物写真2 ……36

Ⅰ　位置と環境

位置と環境

藤崎遺跡が位置する早良平野は福岡市の南西部に当たり、東側を平尾丘陵、南側を背振山系、西側を背振山から派生した叶ヶ岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。また、室見川の河口には愛宕山、麁原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の海流作用によって、生の松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代において、低地になっていたと考えられる。藤崎遺跡は博多湾岸から1.5kmの地点、藤崎、高取、百道地区の東西400ｍ、南北650ｍの範囲に広がっている。早良平野の東北端の湾岸部に位置し、標高

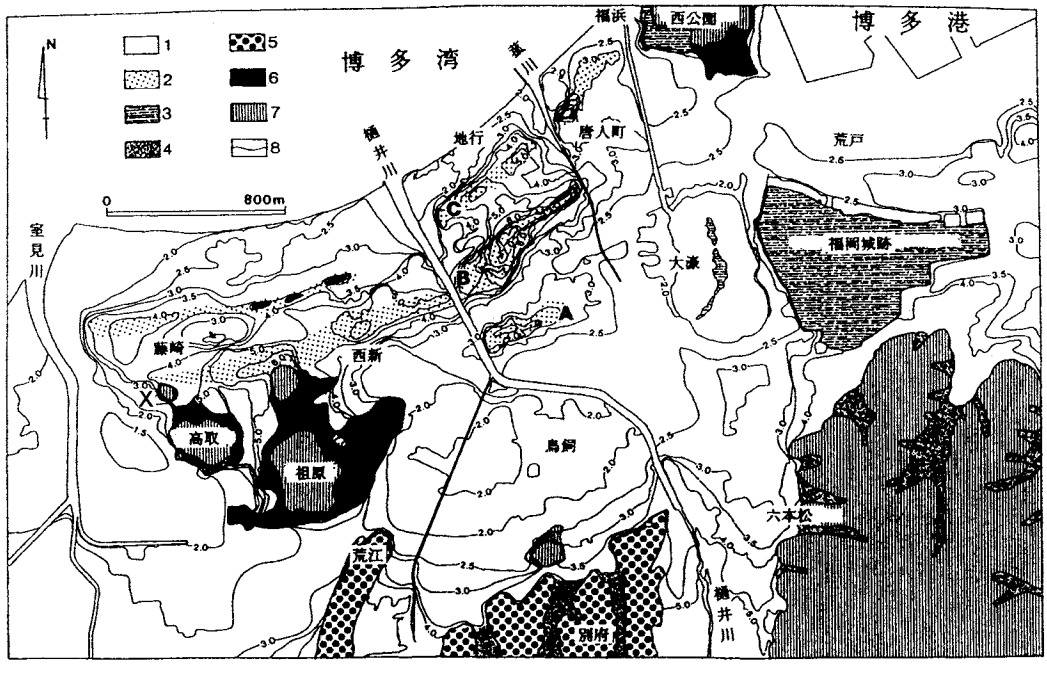
～・～・～縄文海進最盛期海岸線
◎箱崎砂層
⊘基盤岩層
×第28・29次調査地点

Fig.1　藤崎遺跡位置図

5～6 mの砂丘上と南側後背斜面に立地している。藤崎遺跡は第四紀地質図では住吉層と箱崎砂層から成っており、第28・29次調査地点は縄文海進期には、砂丘の端であり、海の湾入部に当たる（Fig. 1）。また、磯望・下山正一氏によると砂丘は3列の微高地からなる砂丘と砂丘間低地から構成される（Fig. 2）。藤崎遺跡が位置する真ん中のB砂丘が最も発達していて、幅約170m、高度8 mに達する。この砂丘は西新から藤崎に連続し、長さは2.5kmに達する。この砂丘からは弥生時代前期の甕棺が出土することから弥生時代前期以前に陸化していた可能性が高い。しかし一部には弥生時代後期まで海浜の状態を示している場所もある。B砂丘とC砂丘間の低湿地は藤崎では弥生時代中期までに、西新では古墳時代初頭までには陸化して、それぞれ遺構が形成されている。C砂丘は西公園から百道にかけての元寇防塁線に沿って分布する。元寇防塁を覆う風成砂が堆積しているため、砂丘列は中世以降に形成されたと考えられる。砂丘の高度は場所によって6 mに達するが、その幅は狭く50m未満である。C砂丘より海側は、古地図などから江戸時代以降に海浜が陸化した地域であることが確認できる。また、文献には藤崎の西側に明治の初期頃まで袖ノ松原と称する松林があったこと、亀原山の東側に慶長年間まで塩浜がつくられていたことが記されており、かなり新しい時期まで内海的な様相を示していたのではないかと思われる。第28次・第29次調査は（Fig. 3）が示すようにB砂丘とA砂丘の砂丘間低地に位置し、北西から南東にかけては低地となっている。

藤崎遺跡では主に弥生時代初頭から古墳時代前期にかけての墳墓、古墳時代後期の住居跡、古代から中世にかけての溝、井戸、土坑等が検出されている。

周辺の砂丘上では藤崎遺跡の東側500m程の同じ砂丘上に西新町遺跡が立地する。藤崎遺跡同様、共同墓地として弥生中期から後期にかけての甕棺墓が検出され、弥生時代終末から古墳時代前期にかけ



1：低地　2：海岸砂丘　3：人工改変地　4：谷底平野　5：中位段丘面
6：麓屑面　7：丘陵　8：等高線（m）　A・B・C　砂丘
×印は藤崎遺跡第28次・29次調査地点の位置

※下山正一・磯望他『福岡平野の古環境と遺跡立地』より転載

Fig.2　調査地点周辺の地形学図

ての作り付けのかまどを有した竪穴住居跡が多数検出されている。かまどの初現を知る上で重要なものである。また、朝鮮半島系の土器、山陰系、畿内系等内外の多数の外来土器が出土しており、海洋交易の拠点集落の様相が窺える。藤崎遺跡から室見川を挟んで西側に連なる砂丘上に姪浜遺跡群がある。同じく弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓が検出されている。室見川をさかのぼると、東岸には有田遺跡群があり、標高15m前後の独立中位段丘上に立地する。旧石器時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代から古墳時代にかけて継続的に集落が営まれ、環濠・甕棺墓群が検出されており、早良平野の拠点的な集落の一つと考えられる。さらに北の沖積微高地では北から、田村遺跡群、東入部遺跡群等が分布する。これらの遺跡では縄文から中世にかけての集落が連綿と形成されている。室見川の西岸では、古墳時代の住居跡が100軒以上検出されている野方遺跡群が立地する。

藤崎・西新遺跡の北側250m程の東西方向に1276(建治)年に築かれた元寇防塁があり、鎌倉時代の汀線を示している。

これまでの調査

藤崎遺跡の発見は明治時代にさかのぼる。明治45年に箱式石棺から三角縁二神龍虎鏡・素環頭大刀が出土し、従来藤崎古墳と称されていた。

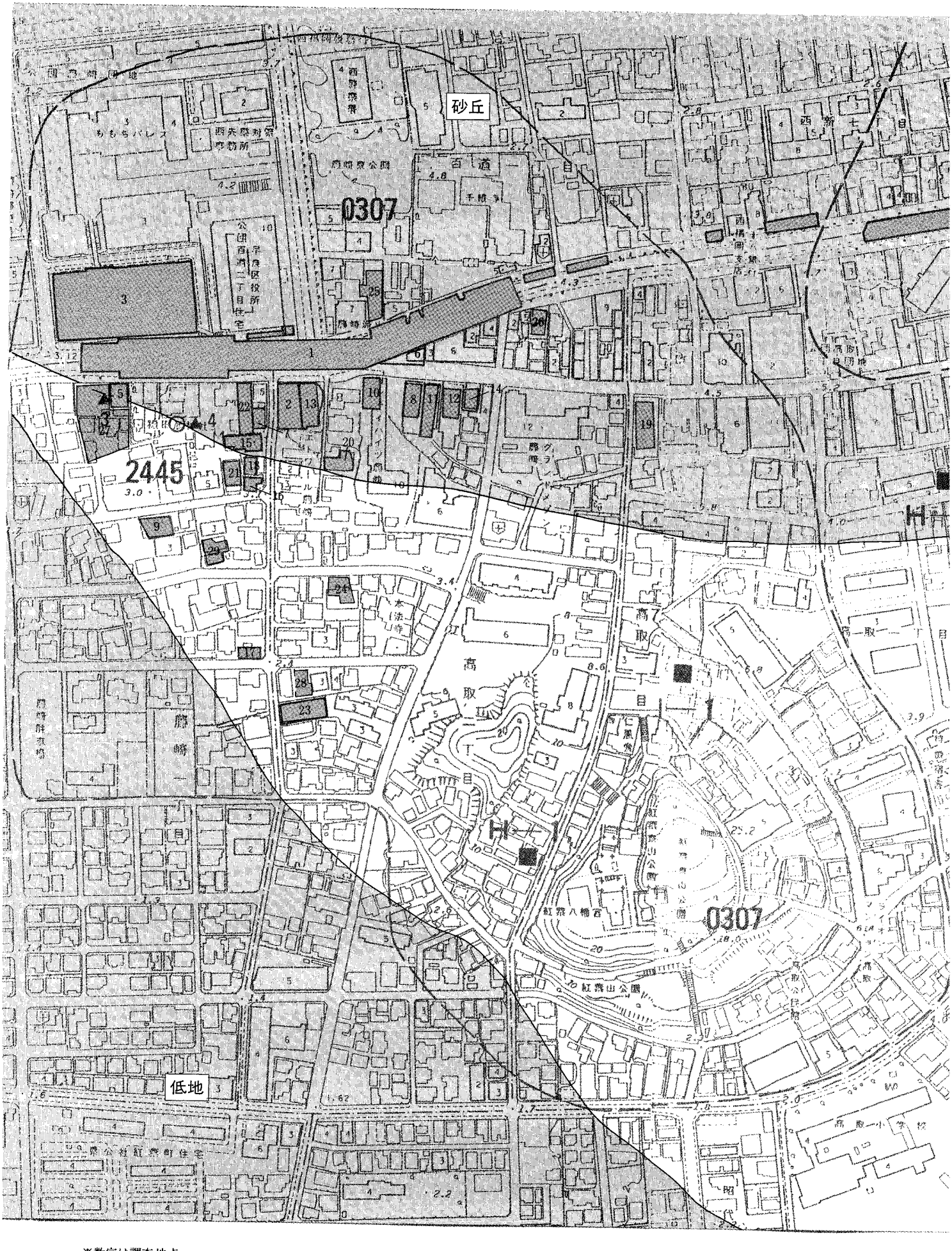
藤崎遺跡は現在まで29次の発掘調査が行われてきた。その中で主に弥生時代、古墳時代初頭・後期、奈良時代、中世の遺構が検出されている。

弥生時代の甕棺墓、箱式石棺墓などの墓地群が検出されている。それは古砂丘の尾根に沿って、東西300m、南北100mの範囲内にある。甕棺墓が出土する砂丘面が緩やかに下りながら、調査区の南に位置する独立丘陵の北裾に達している。これは甕棺墓を築造する際に地形を意識した結果と考えられる。集落としての遺構は第3次調査で終末の住居跡が1軒みつかっているにすぎない。これだけ多くの共同墓地を築いた経済的基盤は不明である。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては方形周溝墓が第3次・9次・10次・13次調査で検出されている。方形周溝墓には切り合いが見られ、短い期間内に形成されている。

古墳時代後期の遺構は第3次・15次・17次・18次・20次調査で住居跡と溝が検出されている。古墳時代後期には藤崎遺跡の西部に散漫に集落が拡がっている様相を呈している。管状土錘等の漁撈具が多く出土しており漁業を生業にしていたと思われる。

奈良時代の遺構は、第3次調査において住居跡が2軒検出されているだけである。

中世になると溝・井戸・土壙墓・土坑等の遺構が数多く検出される。遺跡中央部にある独立丘陵（栄山）の北にあたる第8次・10次・11次・12次・14次調査では13世紀後半を前後する時期の中世溝が検出されている。ほぼ東西に直線的に延びる溝（8次調査1号溝）とやや蛇行している溝（8次調査2号溝）がある。栄山を巡る可能性や、元寇防塁とほぼ平行することから、元寇防塁の第二次防御線とする可能性が指摘されている。第15次・16次・18次調査区からは区画を意味する溝が検出されていて、屋敷地の存在が考えられる。第9次・16次・18次調査では中世の整地層が確認されている。遺物の時期にばらつきが見られ、第9次調査では12世紀後半から13世紀前半にかけての遺物が出土しているが、第16次・18次調査では13世紀の多量の遺物はなく、ごく少量の12世紀後半から13世紀前半期の遺物を下限として、7世紀から8世紀の遺物を多量に含んでいる。今回の第29次調査でも包含層が確認されているが、概していえることは包含層の形成時期が一時期ではないということである。



※数字は調査地点

Fig.3　藤崎遺跡調査区（1/3,000）

II　第28次調査

はじめに

1．調査に至る経緯

1997年１月５日、神永智恵子様より本市教育委員会に早良区高取２丁目313番、314番における鉄筋コンクリート造建物建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの藤崎遺跡群内にあたり、南側隣接地は第23次調査が位置する。これを受けて埋蔵文化財課では1997年１月23日に試掘調査を実施し、遺構を検出した。その後、両者で協議を行った結果、発掘調査を同年４月２日より実施することとなった。

2．調査組織

調査委託		神永智恵子
調査主体	福岡市教育委員会　教育長	町田英俊
調査総括	文化財部長	平塚克則
	埋蔵文化財課長	荒巻輝勝（前）　柳田純孝（現）
	埋蔵文化財課第１係長	二宮忠司
調査庶務	文化財整備課	木原淳二
試掘調査	埋蔵文化財課	松村道博　池田祐司
調査担当	埋蔵文化財課第１係	加藤隆也
発掘作業員	金子由利子　清原ユリ子　佐藤テル子　松井フユ子　柴田タツ子　柴田常人　門司弘子　西尾タツヨ　堀川ヒロ子	

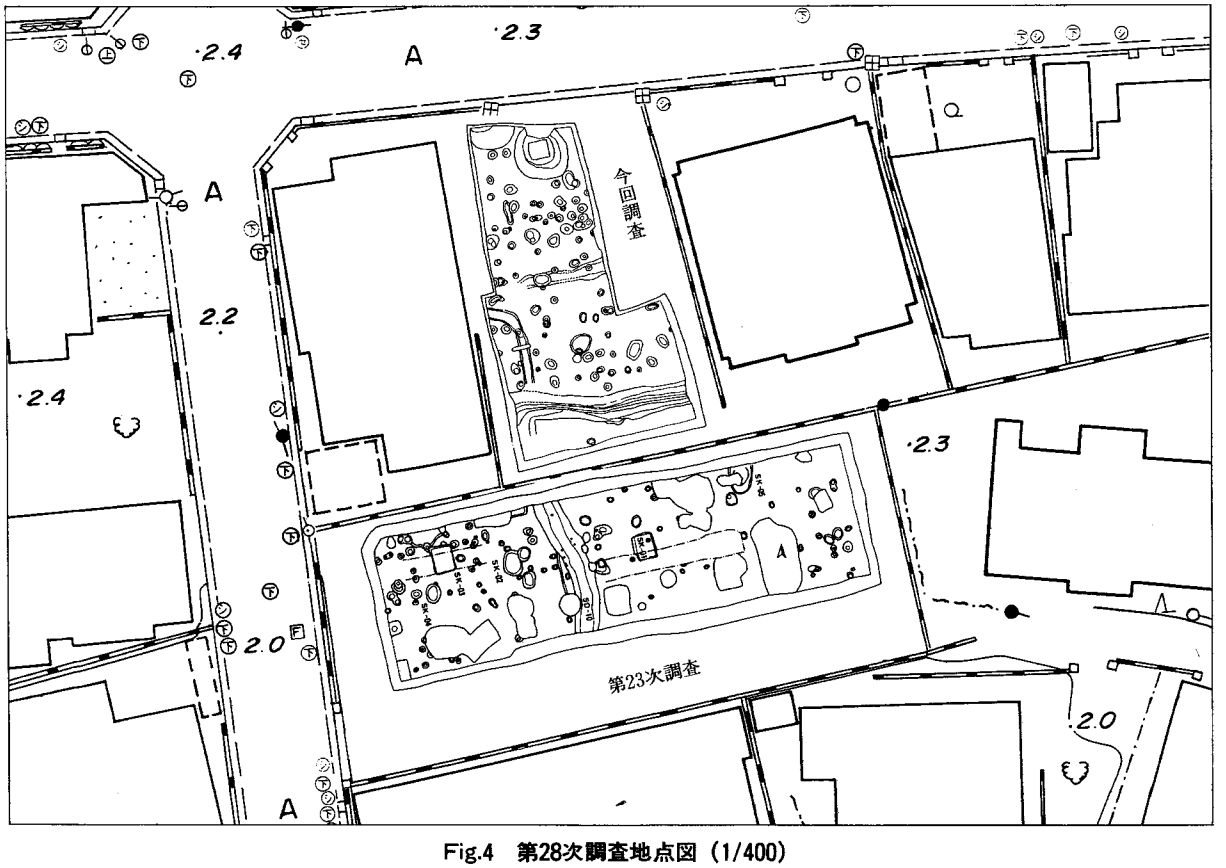


Fig.4　第28次調査地点図（1/400）

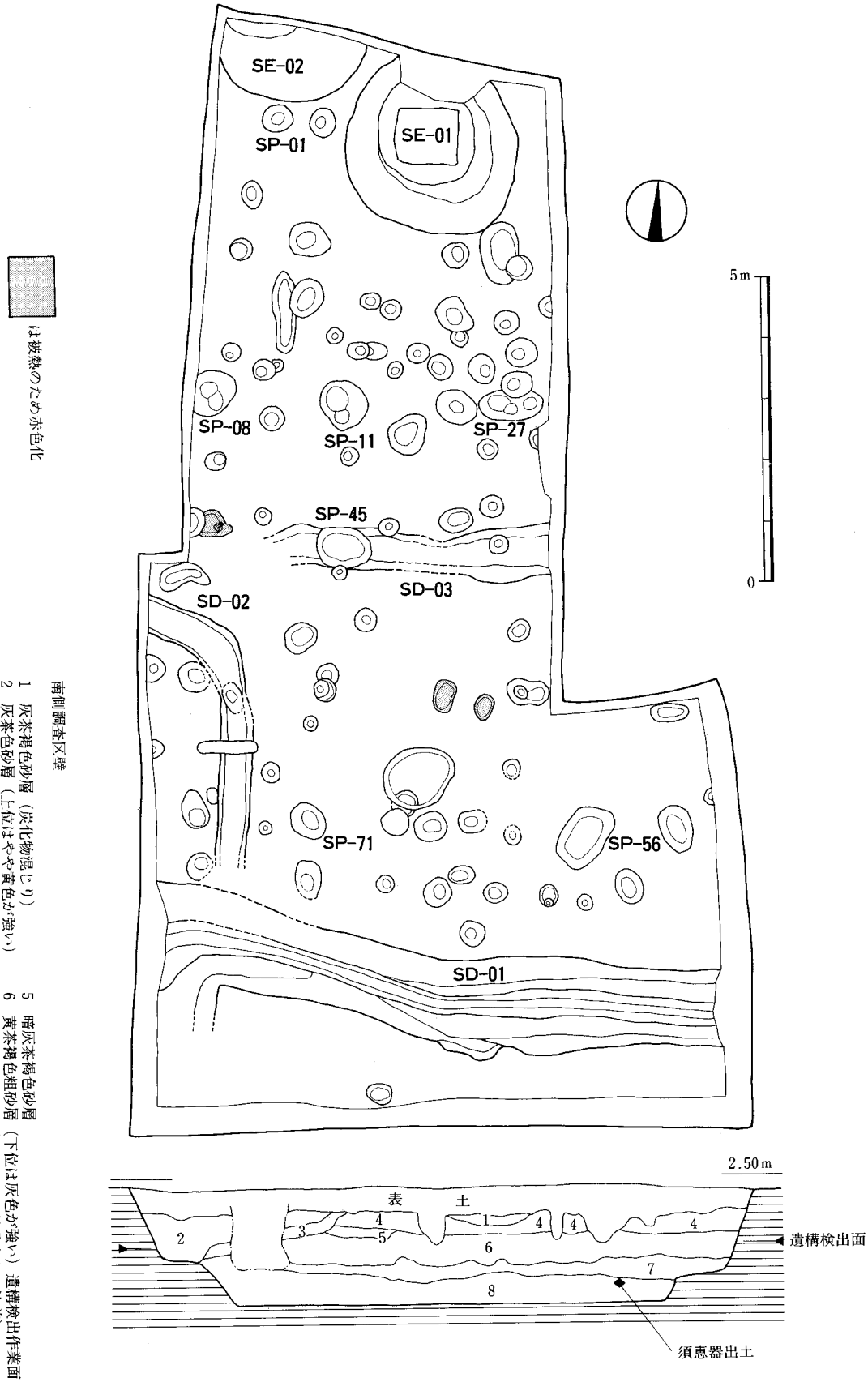


Fig.5 遺構配置図（1/100）

調査の記録

調査地点の現況は宅地であり、排土処理の都合から北側と南側の２回に分けて調査をすることにした。遺構は試掘の成果により現地表面から約90cm掘り下げた標高1.40ｍの高さで遺構検出作業を行った。その結果、柱穴群、井戸２基のほか溝３条を調査した。

１．検出遺構

柱 穴

今回の調査では70個以上のピット状遺構を検出した。検出した他の遺構から柱穴、柵などの存在が想定されるが調査範囲内において建物などを特定できなかった。

出土遺物（Fig.６）SP－01　**1**は白磁合子身。口径6.0、器高1.3、底径4.6cm。SP－08　**2**は土師器小皿、ヘラ切り。口径約8.8、器高約0.8cm。SP－11　**3**･**4**は土師器小皿、糸切りで板状圧痕残る。**3**は口径8.9、器高1.3cm。**4**は口径9.6、器高1.3cm。**5**は瓦器小皿、丸底になると思われる。内外に比較的細かなミガキがみられる。口径9.6cm。**6**は白磁碗。口縁は外反し上端を水平に切る。内面口縁下に沈圏線がはいる。**7**は中国産施釉陶器水注と思われる。口縁は「く」の字形に外反する。胎土は灰色で中に黒色と白色粒を含む。内外に暗緑灰色の不透明釉がかかり、口縁上面に白色の目跡が残る。口径9.4cm。　SP－27　**8**は土師器小皿、糸切り。口径8.0、器高0.9cm。SP－45　**9**は土師器小皿、糸切り、板状痕残る。口径10.0、器高1.1cm。**10**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内面に劃花文を施す。口径15.8cm。SP－56　**11**は土錘。やや扁平な棒状を呈し、端部に穿孔がある。下半は欠損しており、現存長3.6、幅1.9cm、重12g。SP－71　**12**は土師器小皿、糸切りで板状痕残る。口径8.6、器高1.0cm。

井 戸

SE－01（Fig.７、PL.２-(1)）調査区北側東よりにて検出した。遺構検出面では直径約３ｍの不整円形の掘りかたがみられた。約１ｍ掘削すると直径約1.8ｍの不整円形の掘りかたとなり、そのほぼ中央に90×110cmの長方形に木質の痕跡が確認された。さらにその内側に桶がみられた。桶の残存長は約40cmで幅12cm前後の板材を16枚組み合わせてつくられていた。タガの痕跡はみられなかった。

出土遺物（Fig.８　**13**～**31**）　**13**･**14**は土師器小皿。いずれも糸切り。**13**は板状痕が残る。口径8.6、器高0.8cm。**14**は口径9.2、器高1.1cm。**15**～**17**は土師器坏。いずれも糸切りで、**15**・**16**は板状痕が残る。

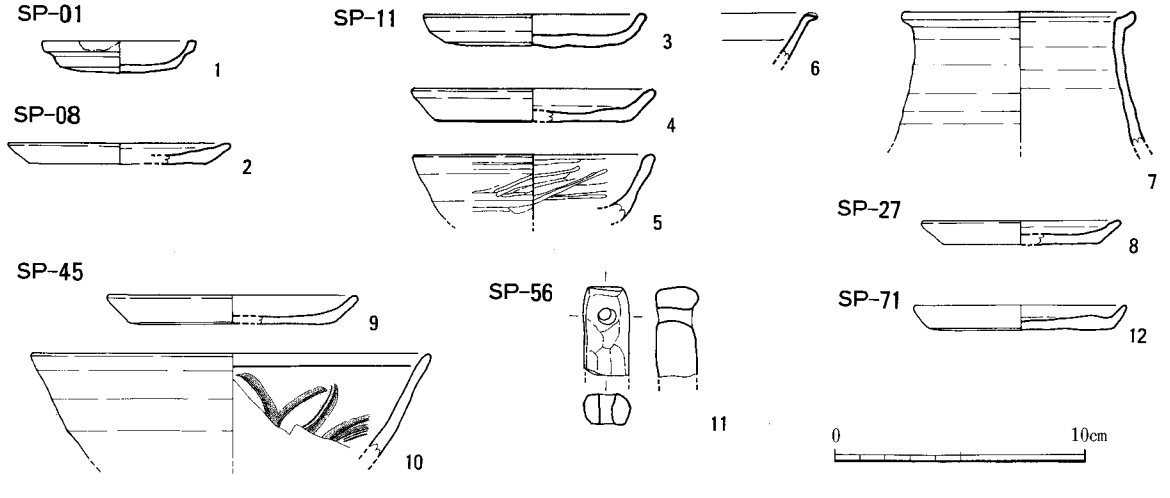


Fig.6　柱穴出土遺物実測図（1/3）

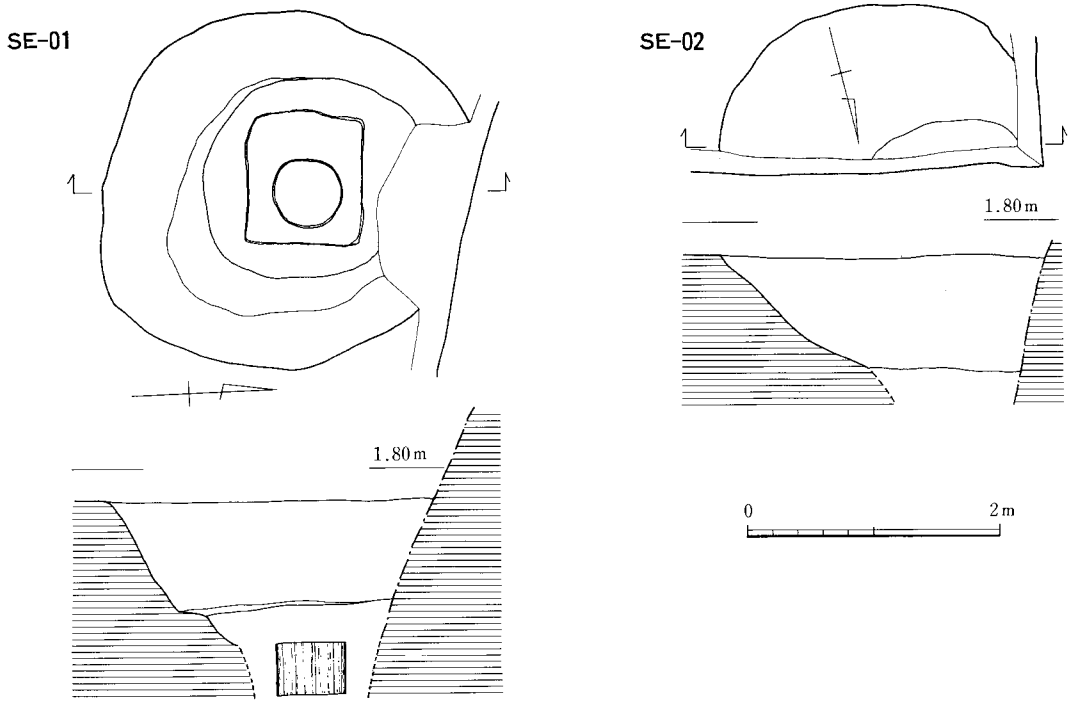


Fig.7　井戸実測図（1/60）

15は口径14.1、器高2.7cm。井戸枠内出土。**18**は瓦質土器鉢と思われる。外面は格子状叩きを施し、上から板状工具によるナデ調整を雑に加える。底径18.6cm。**19**、**20**は白磁平底皿VII類。全面施釉後、外底を釉剥ぎする。**19**は内底に劃花文が施される。口径12.6、器高3.0、底径5.4cm。**20**は内底に印花文が施される。底径は4.8cm。**21**～**25**は龍泉窯系青磁。**21**～**23**は碗Ⅰ類。**21**、**22**は畳付けから高台内は露胎で、畳付けにかかった釉はふきとる。**21**は内底に4ヶ所目跡があり、高台内には目土が付着する。高台径6.1cm。**22**は6.6cm。**23**は内面に劃花文が施される。**24**、**25**は皿。全面施釉後、外底を釉剥ぎする。**24**は底径4.6cm。井戸枠内出土。**25**は内面には劃花文が施される。底径は小さく3.0cm。**26**・**27**は同安窯系青磁皿。**26**は全面施釉後、外底を釉剥ぎする。口径11.6、器高2.5、底径6.2cm。**27**は体外面下位から外底にかけて露胎。底径4.2cm。**28**は青磁瓶。淡灰褐色のきめ細かな素地に淡オリーブ色の半透明釉が内外に施される。表面には細かな氷裂が入る。外面に円形の暗紅灰色の目土が付着する。越州窯系青磁か。井戸枠内出土。**29**は施釉陶器準A群四耳壺。口縁は短く内傾し、肩部には縦耳が4ヶ所付く。黄茶色～暗茶色の不透明釉が外面から内面口縁下にかけて施される。外面耳の下位には熔着痕が巡り、焼成時には別の器物をかぶせて焼いたと思われる。**30**は施釉陶器A群盤。淡黄色の不透明釉がかかり、釉下は化粧掛けする。口縁から内面にかけて施釉し、口唇上面を釉剥ぎする。**31**は滑石製鍋。外面には煤が付着。底径26.8cm。遺構の時期は出土遺物から12世紀後半代と思われる。

SE－02（Fig. 7、PL. 2-(2)）調査区北側西よりにて検出した。井戸掘りかたのみで本体部分は調査区北側外に位置すると思われる。

出土遺物（Fig. 8　**32**～**36**）**32**～**34**は土師器小皿。いずれも糸切り。法量（口径－器高）は順に、8.6-1.1、10.0-1.2、10.0-1.1cm。ただし、**33**、**34**は小片のため法量は不明確。**35**は土師器坏。糸切り。口径15.2、器高2.6cm。**36**は白磁碗IX類。体外面下位から高台内は露胎、内底は施釉後輪状に釉剥ぎする。

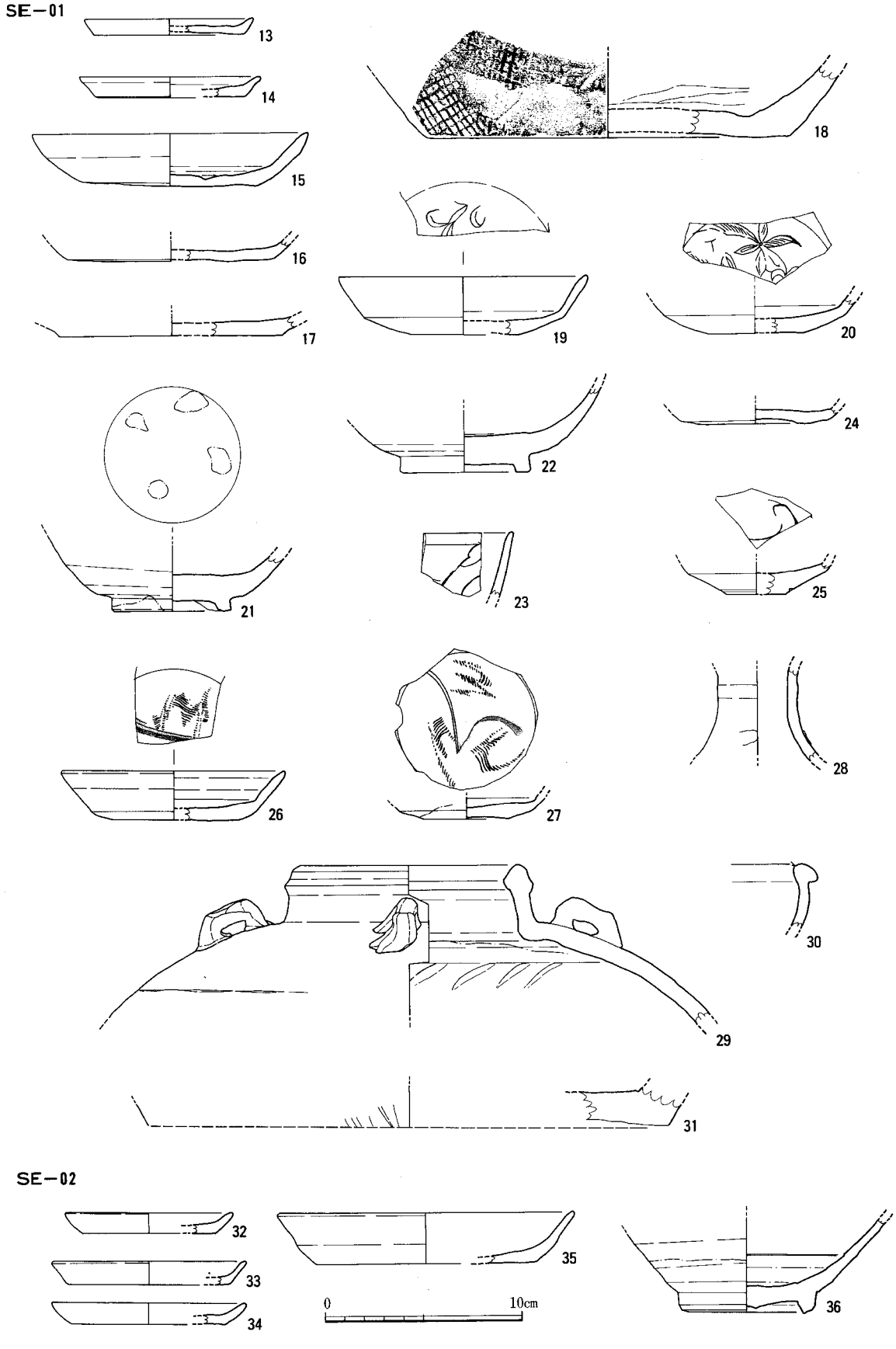


Fig.8　井戸出土遺物実測図（1/3）

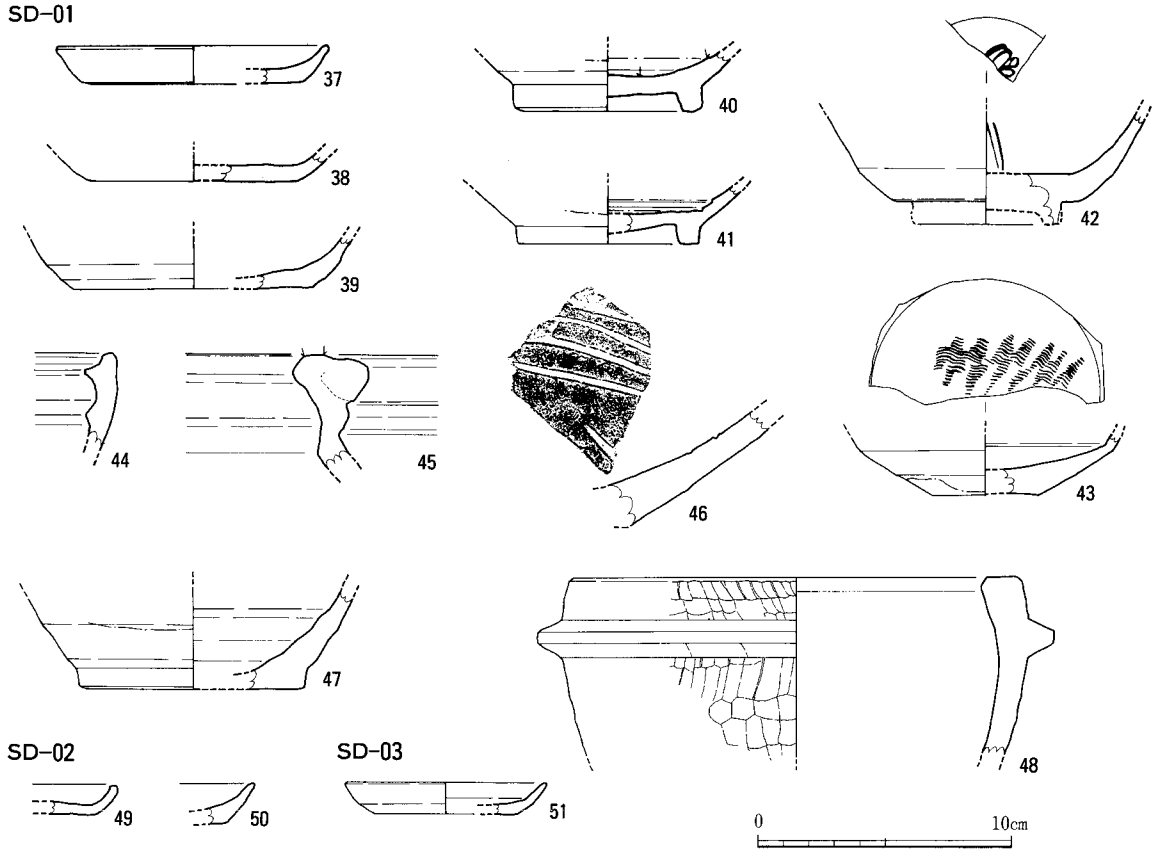


Fig.9 溝出土遺物実測図（1/3）

底径は7.0cm。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半代と思われる。

溝

SD－01 調査区南側にて検出された。幅1.2～1.6m、深さ約60cmを測る。溝の底部の高さは西端のほうが東側に比べ7cmほど低いが大きな傾きはみられない。調査区西側で南側に曲がり、第23次調査のSD－10につながるものと思われる。

出土遺物（Fig. 9 **37～48**）**37**は土師器小皿。磨滅が著しく不明瞭だが、ヘラ切りか。口径10.8、器高1.5cm。**38**、**39**は土師器坏。糸切り。**40**、**41**は白磁碗IX類。体外面下位から高台内は露胎、内底は輪状に釉剝ぎする。底径は**40**は7.4、**41**は7.1cm。**42**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内面に劃花文が施される。**43**は同安窯系青磁皿。体外面下位から外底は露胎。内面に櫛描き文を施す。底径4.2cm。**44**～**46**は陶器C群。**44**は無釉捏鉢。**45**は施釉T字口縁甕で、暗紅灰色の砂粒混じりの胎土に黄緑～暗緑色の不透明釉がかかる。口縁上端面に熔着痕があり、他の器物を覆せて焼いたと思われる。**46**は無釉擂鉢。**47**は施釉陶器壺。赤褐色の細かな胎土に、暗緑色不透明釉がかかる。**48**は滑石製鍋。口縁下に鍔が巡る。口径17.8cm。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半と思われる。

SD－02 調査区西側にて検出した。緩やかなコーナをもち屈曲する。幅約50、深さ10～15cmを測り、断面はU字形を呈する。SD－01との切り合い関係は不明確である。

出土遺物（Fig. 9 **49**、**50**）**49**、**50**は土師器小皿。**49**は磨滅が著しく調整等は全く不明。**50**は糸切り。糸切り底の土師器片が出土していることから、遺構の時期は中世以降と思われる。

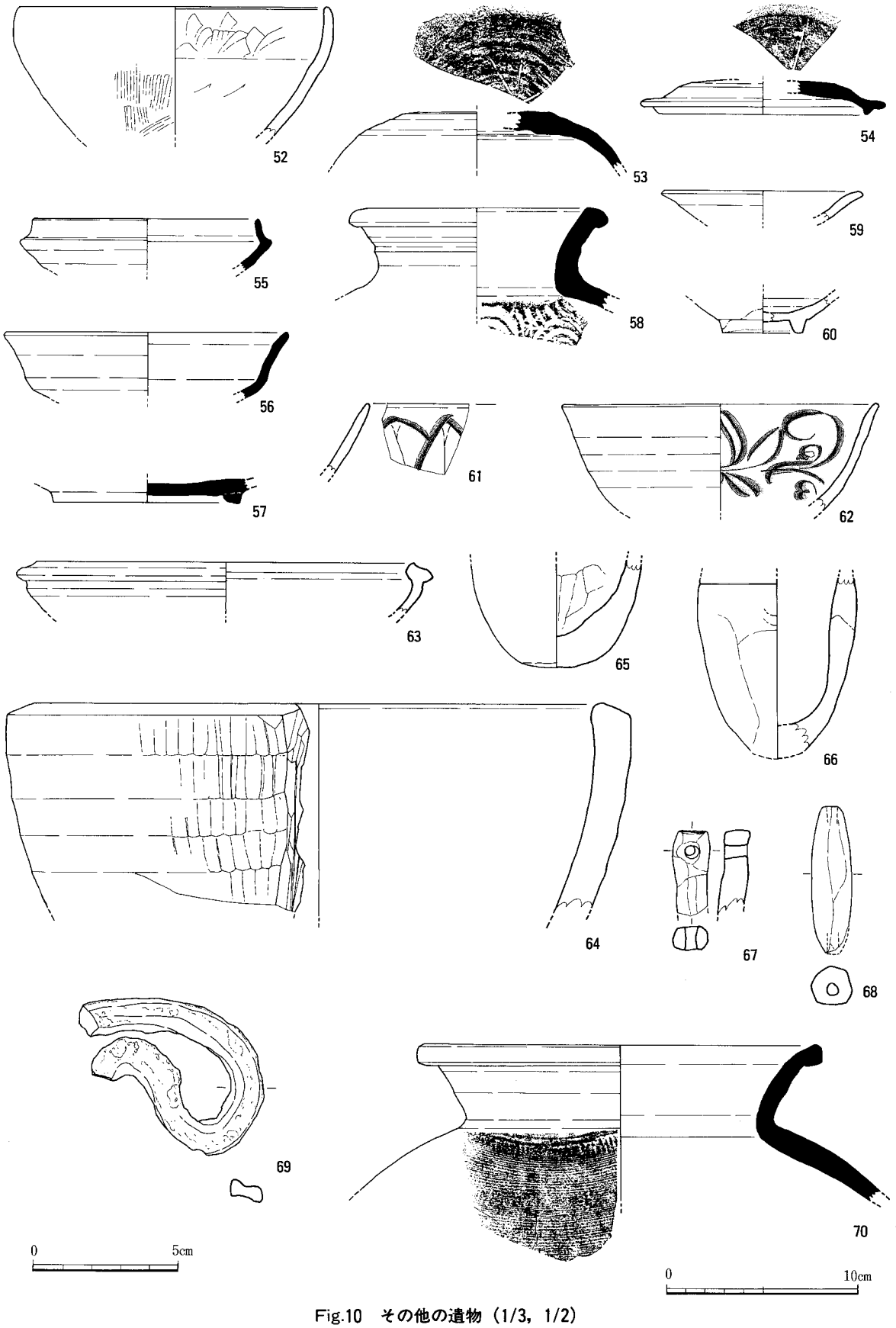


Fig.10　その他の遺物（1/3，1/2）

SD－03　調査区ほぼ中央にて検出した東西方向の溝である。幅70～90、深さ13～26cmを測る。断面はU字形を呈し、東方向に徐々に深くなっている。

出土遺物（Fig. 9　**51**）**51**は土師器小皿。糸切り。口径8.0、器高1.3cm。土師器小皿の法量からすると、13世紀末～14世紀前後と思われるが出土遺物少なく、遺構の時期は不明確。

その他の遺物

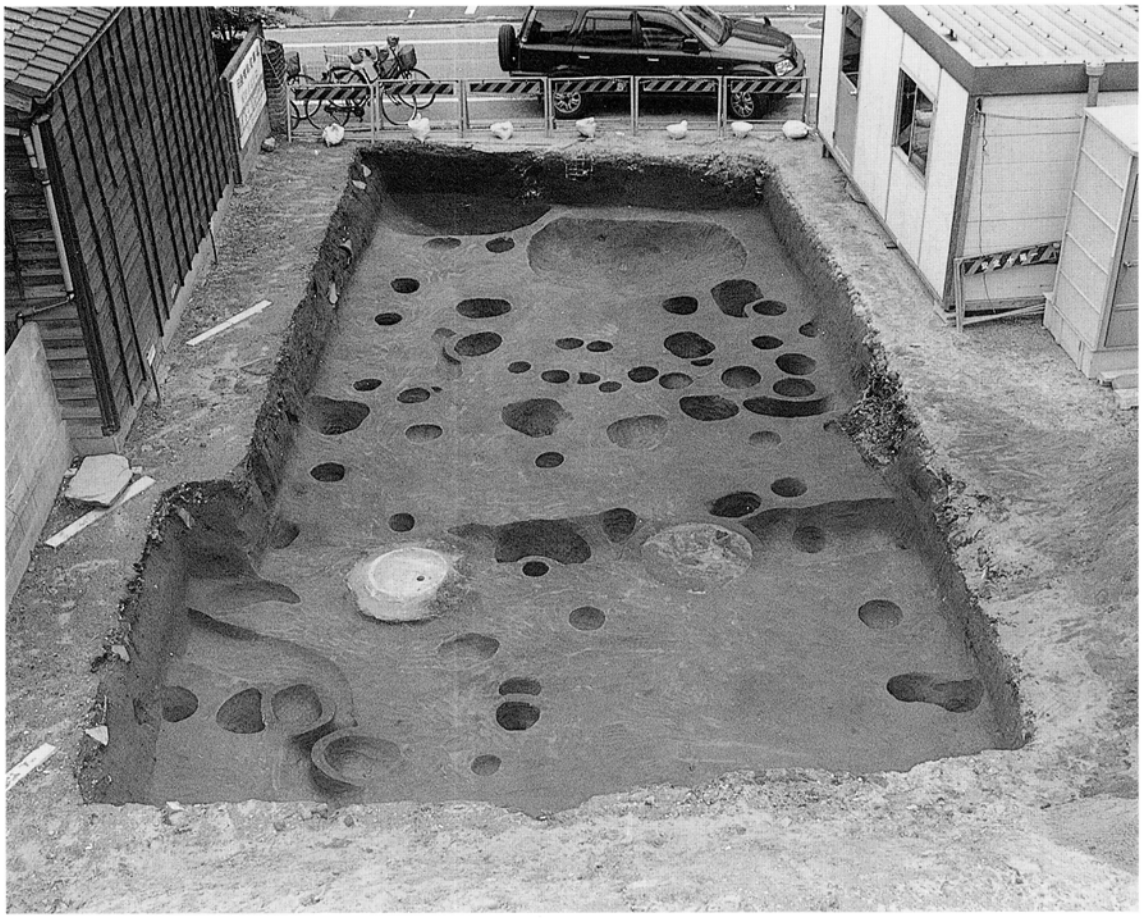
出土遺物（Fig.10　**52**～**70**）**52**は弥生時代の鉢。口縁は若干内湾気味。外面は下位にハケ目調整痕が残り、内面は板状工具によりナデ調整される。口径16.0cm。**53**～**58**は須恵器。**53**、**54**は坏蓋。**53**は天井部外面はヘラ切りのまま未調整で、ヘラ記号がある。**54**は短いかえりをもつ。器高は扁平、天井部はヘラ切りのまま未調整で、ヘラ記号がある。口径10.8cm。**55**～**57**は坏身。**55**は受け部立ち上がりが比較的長く内傾する。口径11.8cm。**56**は口径14.6cm。**57**は高台付き。高台は断面四角形で低い。高台径9.8cm。**58**は甕。口縁は短く外傾し、中位に浅い凹線が巡る。端部は丸く肥厚する。体部内面には同心円のあて具痕が残る。口径11.2cm。**59**、**60**は白磁高台付き皿II類。**59**は口径10.6cm。**60**は内底を輪状に釉剝ぎする。畳付けには白泥が付着する。高台径4.2cm。同一個体の可能性もある。**61**は龍泉窯系青磁碗II類。体外面に鎬蓮弁文を施す。**62**は龍泉窯系青磁碗I類。内面に劃花文を施す。口径16.6cm。**63**は陶器B群平鉢。淡褐色のきめ細かな胎土に、黄味の強い淡オリーブ色の不透明釉がかかる。口径19.4cm。**64**は滑石製鍋。おそらく両側面に縦耳が付くと思われる。外面には煤が付着。口径32.6cm。破損後再加工しており、破面に削りの痕跡がみられる。**65**、**66**は飯蛸壺。胎土は粗く、赤褐色を呈する。**66**は口縁付近外面に細い沈線がめぐり、その下方に1ヶ所穿孔がある。**67**、**68**は土錘。**67**は扁平な棒状を呈し、上端部に径5mmの穿孔がある。現存長4.5、幅2.0cm、重20g。**68**は管状土錘。現存長7.6、幅2.1cm、重32g。**69**はSP－28出土鉄製品。用途は不明。**70**は須恵器甕。口縁は短く外反し、端部は丸く肥厚する。体部は外面には格子目叩きの上からカキ目を施し、内面には同心円のあて具痕が残る。口径21.2cm。南側調査区壁トレンチ内青灰色粗砂層出土。

2．まとめ

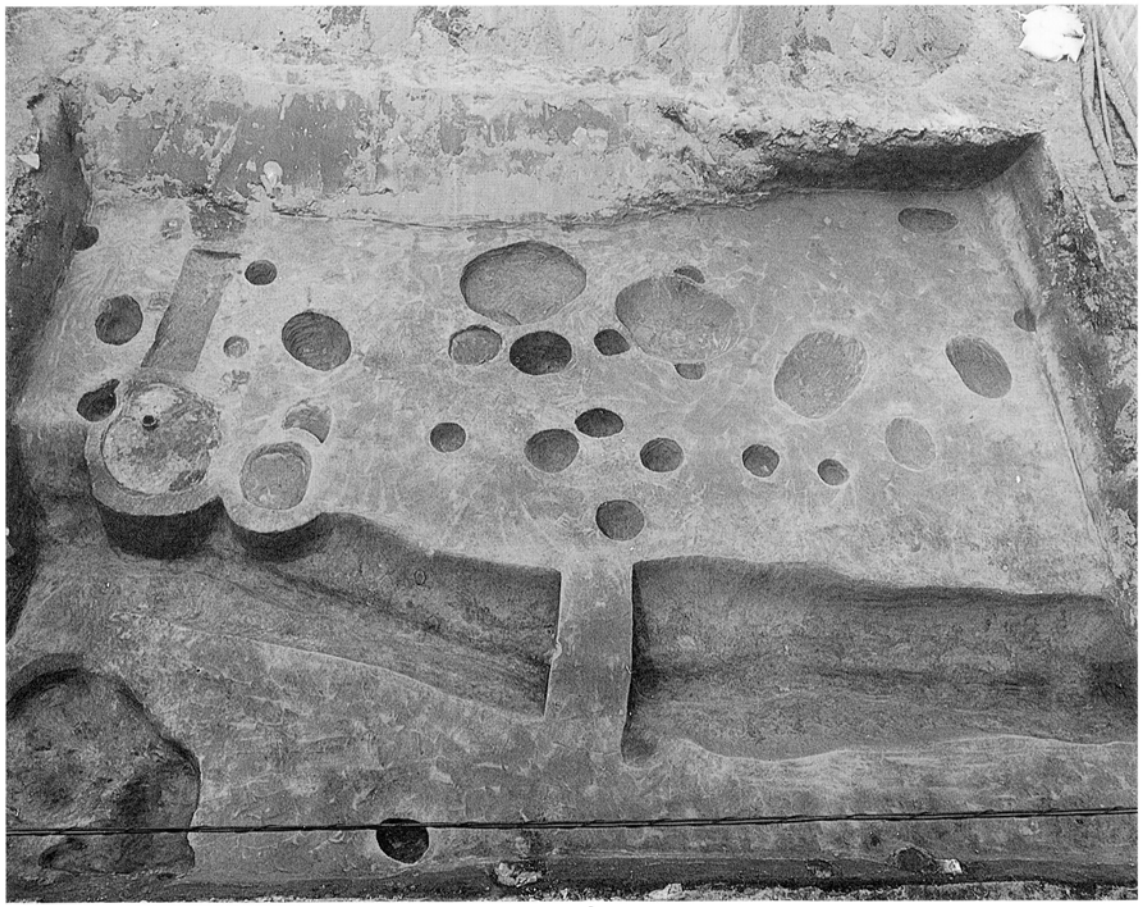
本文中には別項として取り上げていないが、被熱のため下面が赤色化しており、焼土塊がみられる浅いピット状の遺構が3基みられた。第17次調査にて炉址とした遺構のように規模も大きくなく、遺物も出土しておらず同一の遺構とは考えがたい。

藤崎遺跡内には溝により区画された中世の屋敷が広がっており、今回調査したSD－01は南側の第23次調査のSD－10とつながると考えられる。溝はやや蛇行しており、屋敷外濠か建物の区画かは不明であるが北西角が検出されたことになる。

遺構掘削終了後、調査区南壁際にトレンチを設定して掘削を行ったところ、標高0.72mの地点から須恵器の甕口縁部（Fig.10　**70**）が出土した。層位は最下層の青灰色粗砂層にあたり、上面からの遺構掘り込みによる乱れはみられなかった。調査地点は藤崎から西新にかけての砂丘の後背地に立地しており、南側に傾斜していると考えられている。このことをあわせて考えると、今回の調査地点は古墳時代においてはまだ安定した陸地化はしておらず、人の営みがみられるのは北側砂丘上に比べ相当遅れるものと思われる。今回の調査では調査区反転の都合から、南北方向のトレンチを設定できず陸地化の形成状況の確認はできなかった。今後の調査の成果を待ちたい。



(1) 調査区北側全景（南から）



(2) 調査区南側全景（南から）

PL2

(1) SE－01掘削状況（東から）

(2) SE－02掘削状況（南西から）

III　第29次調査

（1）はじめに

1．調査に至る経緯

1997年３月５日、中澤憲二氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に早良区藤崎１丁目２番７号における共同住宅建設計画のための埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、1997年５月27日に試掘調査を行った。その結果、申請地の北側に設定した試掘トレンチにおいて土坑・ピットが検出され、輸入陶磁器が出土した。その成果をもとに協議を重ねたが、現状での保存、設計変更が困難という結論になり、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は1997年６月９日から1997年７月４日まで行った。

最後になりましたが、発掘調査を行うにあたり、地権者である中澤憲二氏をはじめ、多くの方々には多大な御協力を頂きました。記して感謝いたします。

2．調査の組織

調査委託：中澤憲二
調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝（前任）　柳田純孝（現任）
　　同課第１係長　　二宮忠司
調査庶務：内野保基（前任）　木原淳二（現任）
事前審査：松村道博　屋山洋
調査担当：星野恵美
調査作業：金子由利子　清原ユリ子　佐藤テル子　柴田タツ子　柴田常人　西尾タツヨ
　　堀川ヒロ子　松井フユ子　門司弘子
整理作業：衛藤琴美 蜂須賀博子　竹田弘子

Fig.11　第29次調査地点図（1/500）

（2）調査の概要

調査区は藤崎遺跡群の南西に位置し、調査前の標高は2.8m前後を測る。調査区の基本層序は表土、包含層（厚さ20～30cm）である暗茶褐色砂、地山である黄褐色砂、黄白色砂、灰白色砂、白色砂となる。白色砂（標高20cm）まで掘削すると湧水する。遺構は包含層である暗茶褐色砂（第１面）、地山である黄褐色砂（第２面）で検出した。検出した主な遺構は古墳時代の竪穴住居跡１軒・掘立柱建物１棟、中世の井戸１基・溝１条である。他に土坑・ピット群がある。主な遺物としては土師器・須恵器・輸入陶磁器・土錘などがある。

第１面と第２面とも古墳時代・中世の遺構が確認できた。第１面で検出できなかった遺構を第２面で検出した可能性がある。

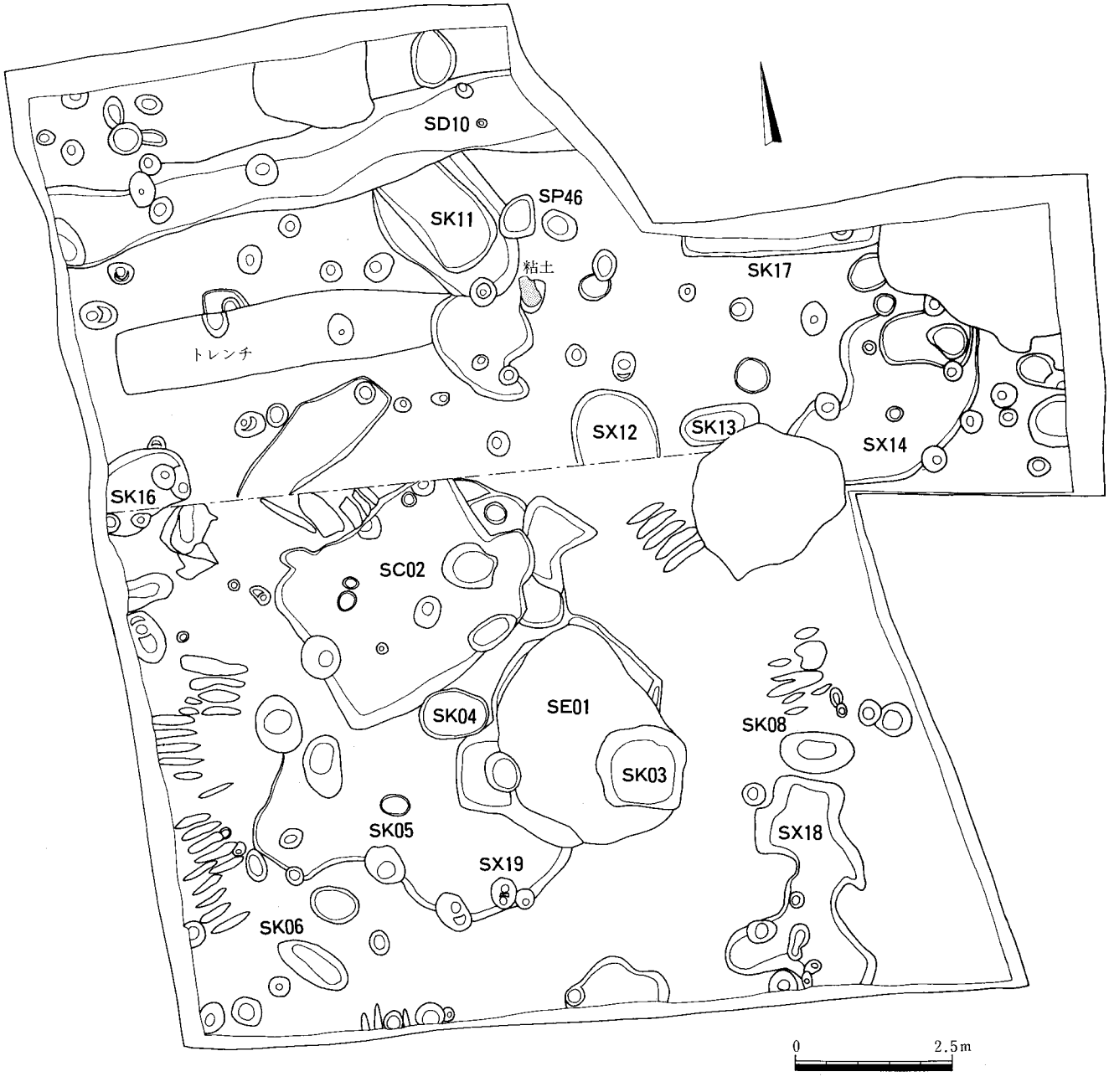


Fig.12　第1面遺構配置図（1/100）

（3）遺構と遺物

①竪穴住居跡

SC02（Fig.14、PL 5）

調査区の中央に位置する方形プランの竪穴住居跡で、第１面で検出した。攪乱を受け、他の土坑に切られてはいるが、ほぼ全貌を窺える。東西3.4m、南北2.9m、壁の残存高25cmを測る。主柱穴は確認できなかった。床面は部分的に固くしまっていて、貼床をした可能性がある。東壁やや南寄りにかまどを付設している。かまどの遺存状況は悪く、明確なプランは検出できなかった。両袖は残っていないが、白色粘土の塊、焼土、炭化物が散在していた。住居の廃棄の際に破壊したと考えられる。燃焼部は10cm程、浅く掘り窪められている。住居の北東側で須恵器の甕が浮いた状態で出土した。他に須恵器・土師器片・土錘・水晶の切り子玉・砥石片が出土した。

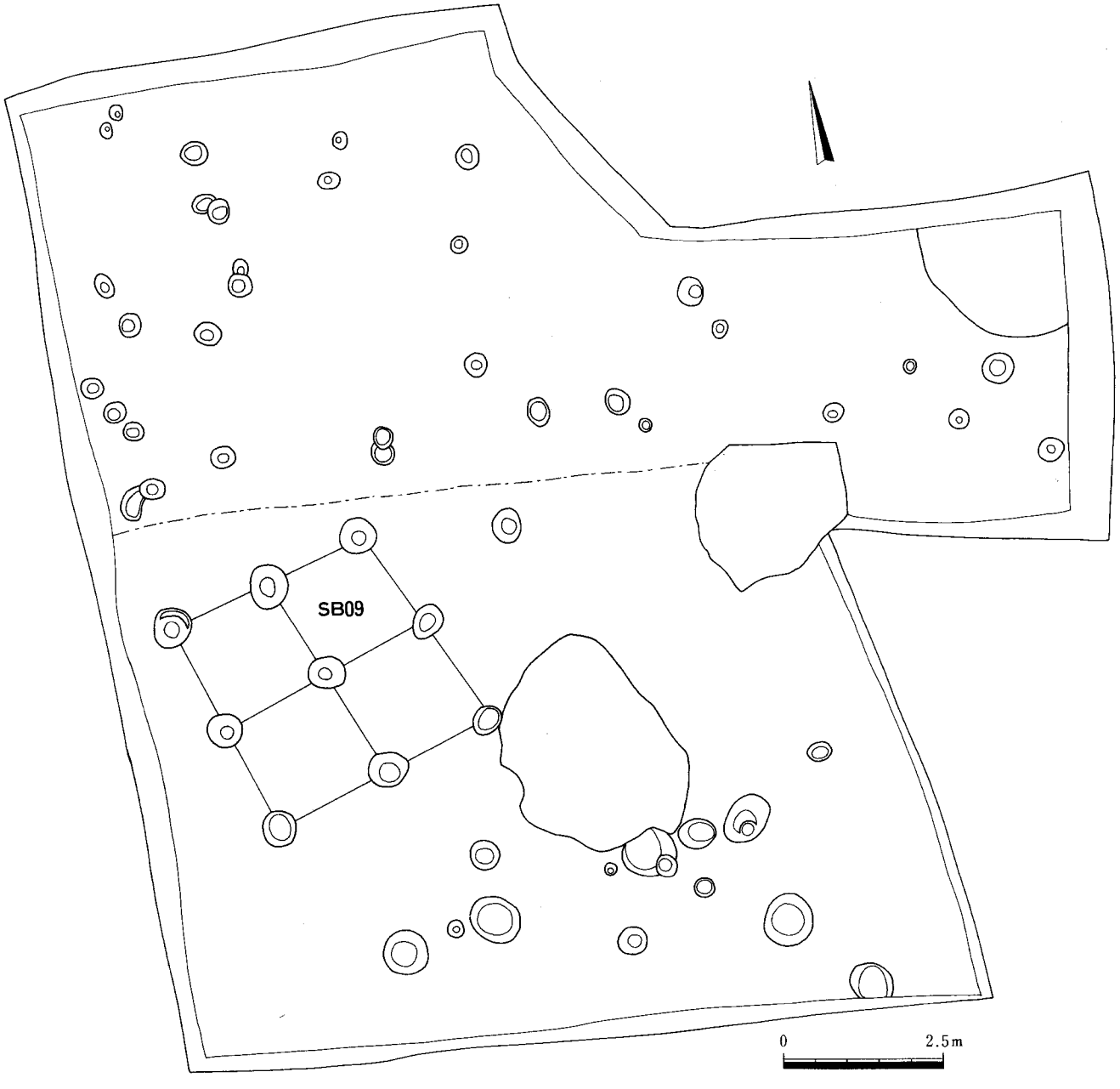


Fig.13　第2面遺構配置図（1/100）

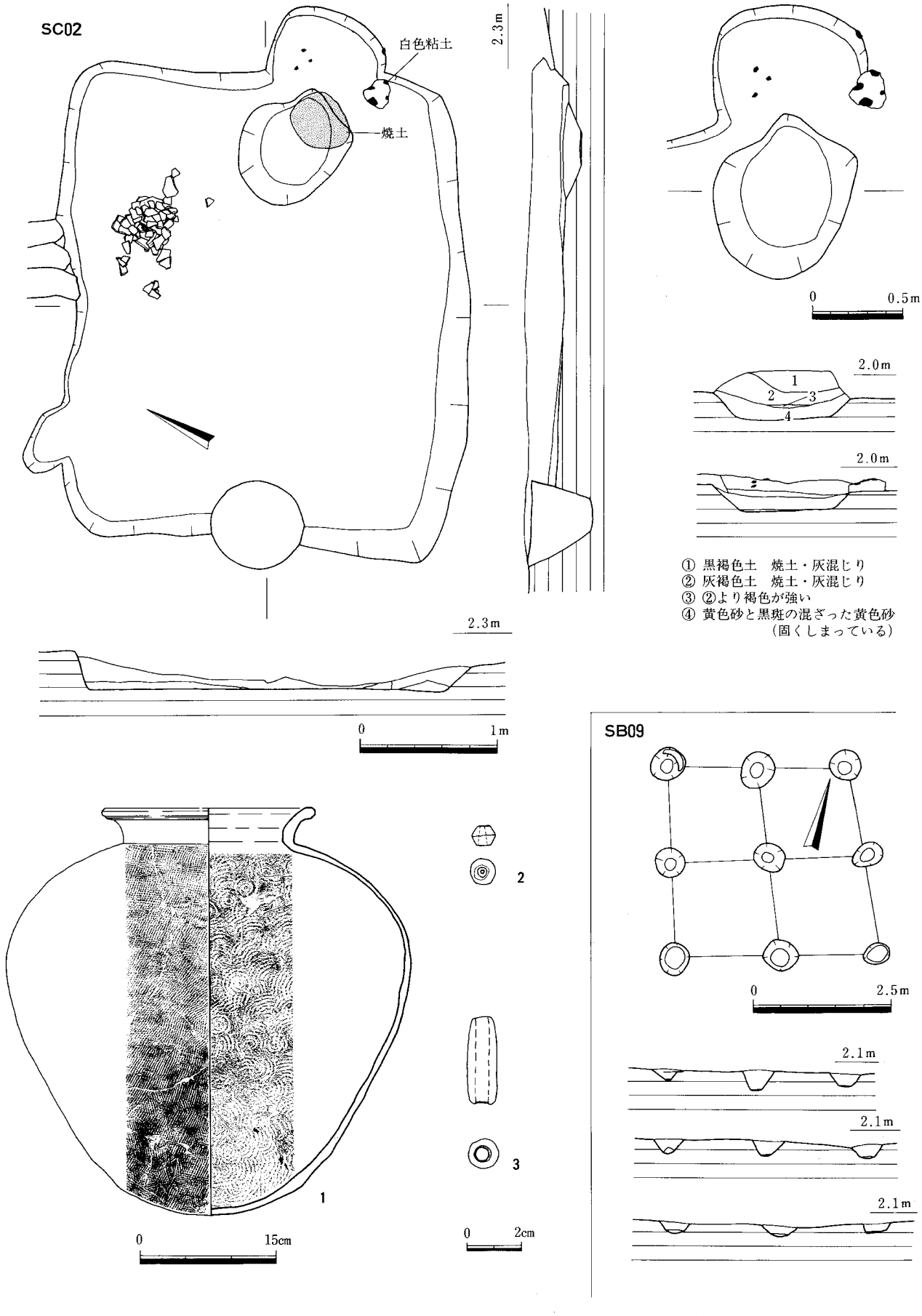


Fig.14　SC02（1/40, 1/30）・SC02出土遺物（1/6, 1/2）・SB09（1/100）実測図

出土遺物（Fig.14、PL 8）

1は須恵器の甕である。口径22.8cm、最大胴部径44cm、高さ44.6cmを測る。外面は叩きの後横なでを、内面は同心円文を施す。口縁部は横なでで仕上げている。内外面ともに灰色を呈し、底部には焼きぶくれがある。**2**は水晶製の算盤玉で径0.9cm、高さ0.7cmを測る。片面穿孔で孔径は1.5mm・3.0mmである。丁寧に磨いて仕上げている。**3**は管状土錘で全長4.7cm、直径1.7cmを測り、円柱状を成している。全面丁寧ななでで仕上げる。両端は使用により磨滅している。胎土に角閃石を少量含み、にぶい褐色を呈する。重量11.36gである。

②掘立柱建物

SB09（Fig.14、PL 4）

調査区の中央に位置し、9本の柱のうち2本は第1面で、他は第2面で検出した。2間×2間の総柱建物であるが、やや歪んでいる。主軸を約N－23°－Wにとる。梁行き・桁行きはほぼ3.5mであるが、北側が短く3.3m、南側が3.8mを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径40～70cm、深さ10～37cmを測る。須恵器・土師器の小片が出土している。

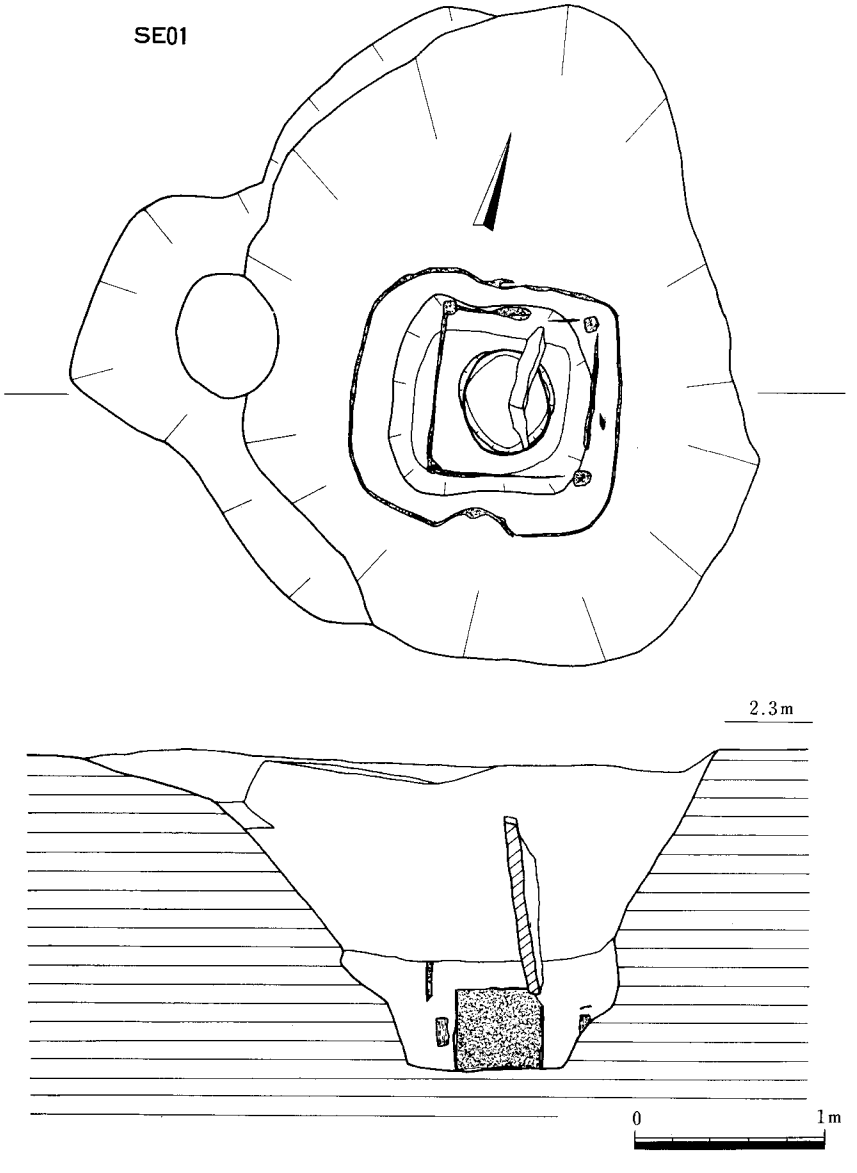


Fig.15 SE01（1/40）実測図

③井戸

SE01（Fig.15、PL 6）

調査区の南側に位置し、第1面で検出した。掘方は2段掘りとなっていて、1段目は短辺2.6m、長辺3.6mを測る隅丸方形を呈し、2段目は深さ1.3mの部分で、一辺1.4mの方形を呈する。深さは検出面から1.6mを測る。25cm掘り下げた段階で大石が立った状態で出土した。大石は長さ95cm、幅70cm、厚さ5～10cmを測る。石の面は赤色を呈しているが、赤色顔料を塗布したり、焼けた状況ではない。1m掘り下げると、木質が出土し始め1.3mまで掘り下げると井戸側を検出した。井戸側は板材を方形に組んだものである。四隅に一辺6.5cmの角杭が打ち込まれ、長さ約16cm残存している。杭と杭

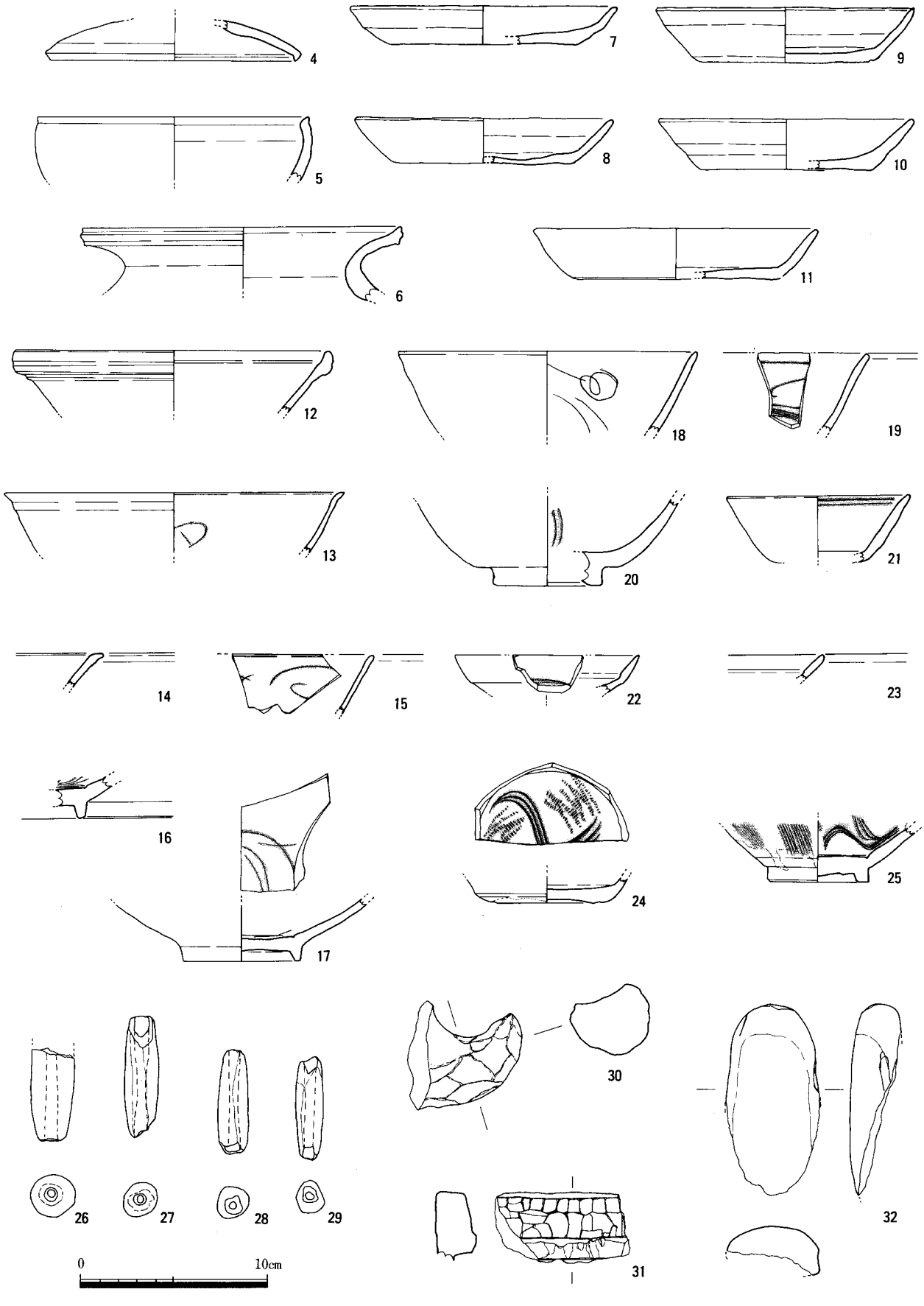


Fig.16　SE01出土遺物実測図（1/3）

の間には板材がはめ込まれたと考えられるが、遺存状況が悪く、一部分が残っているにすぎない。井戸側の中央で、直径45～55cmを測る円形の曲物を検出した。曲物は厚さ１cm、高さ40cmを測る。井戸側内は青灰色砂を主とした覆土で、曲物内は青灰色の粘性を帯びた砂質土に白色粘土塊が混入している。最下層は白色砂で酸化鉄の沈殿が見られる。湧水はなかった。

須恵器・土師器・陶磁器・土錘・磨製石斧・滑石石鍋・砥石片・滑石製品が出土した。

出土遺物（Fig.16、PL８）

4は須恵器の坏蓋で口径13.4cm、現存高2.2cmを測る。灰色を呈し、ろくろの回転は反時計回りである。**5**は須恵器の高坏で脚部は欠損している。口径14.8cm、現存高4.5cmを測る。外面は暗赤灰色、内面はにぶい赤褐色を呈し、ろくろの回転は反時計回りである。**6**は須恵器の甕で口径17.4cm、現存高7.1cmを測る。灰色を呈し、ろくろの回転は反時計回りである。**7**～**11**は土師器の坏身である。いずれも金雲母を含み、浅黄橙色を呈する。底部はすべて糸切りで**7**・**9**は板目圧痕がある。ろくろの回転は**7**・**9**・**11**が反時計回り、**8**・**10**が時計回りである。**7**は口径14.8cm、底径10.4cm、器高2.1cmを測る。**8**は口径14.2cm、底径10.2cm、器高2.4cm。**9**は口径14.2cm、底径10.0cm、器高3.0cm。**10**は口径14.0cm、底径9.5cm、器高2.8cm。**11**は口径15.6cm、底径11.4cm、器高2.8cmを測る。**12**～**17**は白磁の椀である。**12**は口縁部に大きな玉縁を有し、玉縁の中央に鈍い沈線を１条持つ。口径は17.4cm、現存高3.4cmを測る。胎土は白色微砂粒を多く含み、にぶい灰白色を呈する。釉はやや黄灰色を帯びた白色釉である。下半には釉がかかっていない。**13**の口縁部は外上方に向かって延び、端部を水平にしている。体部内面に花文が見られる。口径は18.6cmを測る。**14**の口縁端部は水平である。**15**の口縁はやや外反気味に、端部は丸くおさめている。体部内面に花文が見られる。**13**・**14**・**15**の胎土は白色微砂粒を多く含み、灰白色を呈し、釉は灰色に近い白色を呈する。**16**・**17**は底部片で内面見込みに沈線、花文をもつ。底部には釉はかかっていないが、一部垂下している。**16**の胎土は白灰色を呈し、釉はやや青灰色を帯びた白色を呈する。**17**の胎土は灰白色を呈し、釉は灰色に近い白色を呈する。**17**の底径は6.4cmを測る。**18**～**23**は龍泉窯系青磁である。**18**・**19**は椀の口縁部片である。**18**の口径は16.6cmを測り、体部内面に飛雲文をもつ。胎土は灰白色を呈し、釉は緑黄色を呈する。**19**は体部内面に花文をもつ。胎土は灰白色を呈し、釉は暗緑色を呈する。**20**は椀の底部片で、底径5.9cmを測る。体部内面にはヘラ状工具で片彫りの線をいれる。胎土はにぶい黄色を呈し、釉は緑黄色を呈する。高台内は露体である。**21**は小椀で口径10.2cmを測り、口縁部内面に２条の浅い沈線をもつ。胎土は灰白色を呈し、釉は明緑灰色を呈する。**22**・**23**は皿の口縁部片で、胎土は灰白色を呈し、釉は暗緑色を呈する。**22**の口径は10.2cmを測る。内面見込みにヘラ状工具で片彫りの花文をいれる。**24**・**25**は同安窯系青磁である。**24**は皿の底部片で、底径６cmを測る。内面見込みには細かい櫛目を有する。胎土は灰色を呈し、釉は緑灰色を呈する。**25**は椀の底部片で底径5.4cmを測る。内面見込みと体部との境に段を有し、内面にはヘラ状工具で片彫りの花文と櫛目を、外面にも細かい櫛目をもつ。**26**～**29**は管状土錘である。**26**は大型のもので半分欠損しているが、現存長5.0cm、直径2.4cmを測る。浅黄橙色を呈し、重量21.73ｇである。**27**～**29**はゆるい紡錘形を成し、両端は使用により磨滅している。にぶい黄橙色を呈する。**28**・**29**は胎土に赤褐色粒・金雲母を少量含む。**27**は全長6.7cm、直径1.9cm、**28**は全長5.7cm、直径1.7cm、**29**は全長5.6cm、直径1.5cmを測る。重量は**27**は18.35ｇ、**28**は12.99ｇ、**29**は9.77ｇである。いずれも全面なでで仕上げ、両端は使用により磨滅している。**30**は把手で、にぶい黄褐色を呈する。下部は黒色化している。**31**は滑石製石鍋の破片である。鍔の断面形は台形を呈する。外面は全面に削り痕跡があり、すすの付着は見られない。**32**は磨製石斧である。刃部は欠損している。現存長は10.3cm、幅は5.0cmを測る。石材は玄武岩系である。

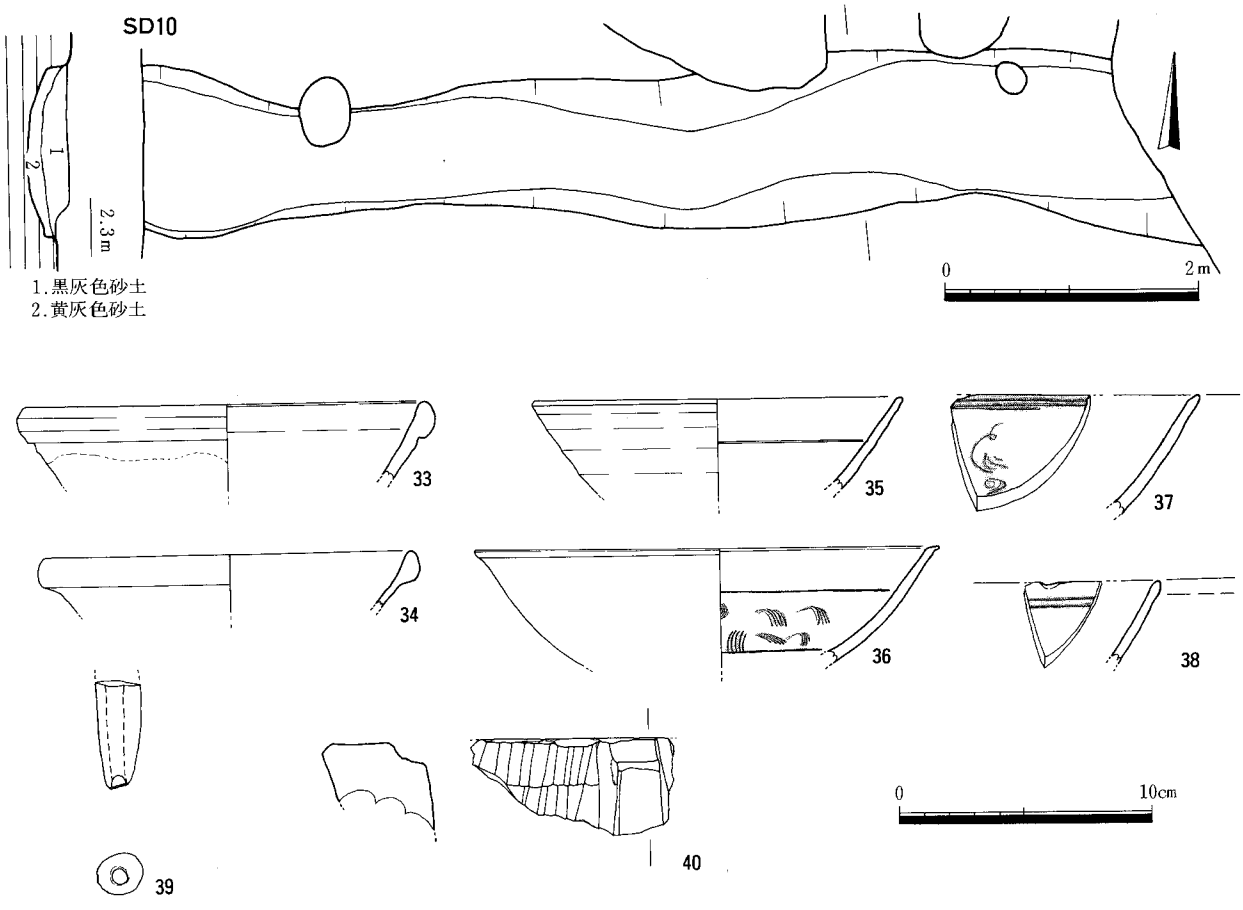


Fig.17　SD10（1/60）・SD10出土遺物（1/3）実測図

④溝

SD10（Fig.17、PL 5）

調査区の北側に位置し、第１面で検出した。東西方向に走り、幅1.2ｍ、深さ32cmを測る。覆土は上層が20cmを測る黒灰色砂、下層が黄灰色砂である。須恵器片・土師器片・陶磁器片・中国製陶器片・土錘・瓦・滑石製石鍋・砥石片が出土した。

出土遺物（Fig.17・18、PL 9）

33～**36**は白磁椀の口縁部片である。**33**・**34**は玉縁口縁で、**33**は口径16.8cm、**34**は口径14.8cmを測る。**33**の胎土はにぶい黄橙色を呈し、釉は浅黄色を呈する。外面下半には釉はかかっていない。**34**の胎土は灰白色を呈し、釉はやや青灰色を帯びた白色を呈する。**35**は口径15.0cmを測り、口縁端部は丸くおさめている。体部内面中位に細い沈線をもつ。胎土はにぶい黄橙色を呈し、釉はやや青灰色を帯びた白色を呈する。釉全体に貫入がみられる。**36**は口径17.6cmを測る。口縁は外反し、端部はやや水平である。体部内面に櫛で花文を描いている。胎土は灰色を帯びた白色を呈し、釉はやや青灰色を帯びた白色を呈する。**37**・**38**は龍泉窯系青磁椀の口縁部片である。**37**は内面口縁部下に２条の沈線をもち、体部に飛雲文片彫りをする。胎土は灰白色を呈し、釉はやや青味を帯びた緑色を呈する。**38**は内面口縁部下に２条の沈線をもち、口縁部に輪花をもつ。胎土は灰白色を呈し、釉は暗緑色を呈する。**39**は管状土錘で半分欠損しているが現存長4.3cm、直径1.8cmを測る。端部は使用により磨滅している。胎土に赤褐色粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。重量10.81ｇである。**40**は滑石製石鍋の破片であ

る。鍔の断面形は台形を呈する。外面は丁寧な縦方向の削り痕跡がある。

41～**45**は瓦である。**41**・**42**は丸瓦の破片で両面とも灰黒色を呈し、いぶしている。**41**は厚さ1.0～1.4cmを測る。凸面に縄目叩き、凹面に布目を施した後、なで成形により、擦り消している。中位に目釘孔がある。**42**は玉縁丸瓦片で、玉縁の厚さは1.2～1.5cm、胴部は2.4cmを測る。玉縁基部内面には紐の痕が見られる。凸面は丁寧になで成形をしているが、凹面は布目痕が残る。**43**・**44**・**45**は平瓦の破片である。**43**はやや黒味を帯びた灰色を呈する須恵質のもので、厚さ2.1～2.6cmを測る。凸面の広端面側は斜格子の叩きが残り、端縁側は粗くなでている。凹面には細かい布目痕が残る。**44**・**45**は灰色を呈する須恵質のものである。**44**は厚さ1.4cmを測り、凸面は縄目叩きを施した後、なで成形で擦り消しているが、部分的に縄目が残る凹面は細かい布目痕が残る。**45**は薄く、厚さ0.8cmを測る。凸面は横方向のなでを施した後、粗く縦方向のなでを施している。凹面は細かい布目痕が残るが、中位程に縦方向の紐状の痕跡が見られる。

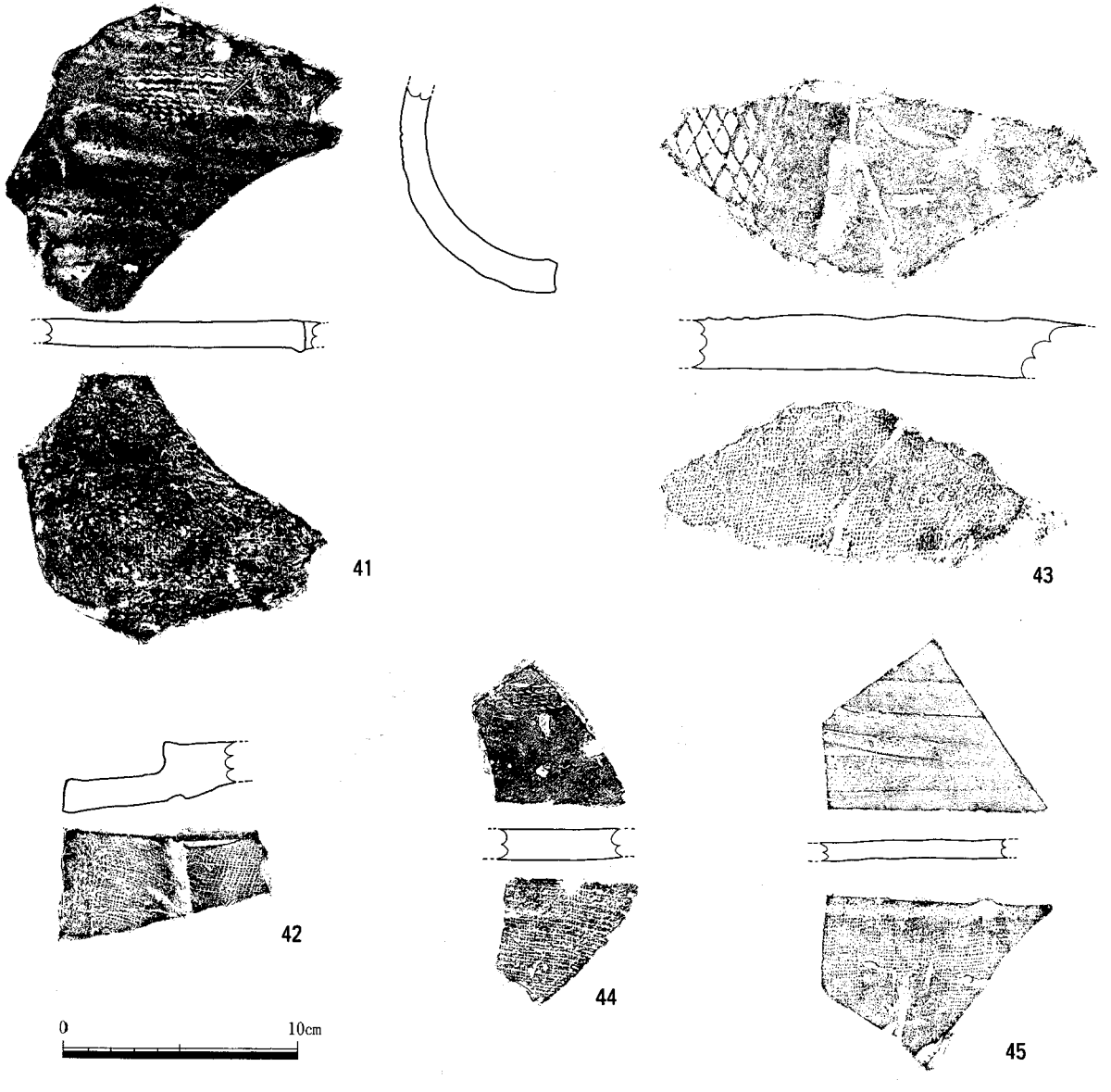


Fig.18　SD10出土瓦実測図（1/3）

⑤土坑

SK03（Fig.20、PL 7）

調査区の中央に位置し、SE01を切っている。第１面で検出した。平面プランは方形を呈し、一辺1.4m、深さ60cmを測る。50cm掘り下げると、骨片が出土したが、脆く、遺存状況は悪かった。覆土は白灰色砂である。土製の人形が出土した。他に須恵器片・土師器片・龍泉窯系青磁片が出土した。

出土遺物（Fig.19、PL 9）

46は土製の人形で一部欠損しているが、両手で耳を隠しているように見える。「きかざる」と考えられる。全長2.5cmを測り、浅黄橙色を呈する。近くに近世鎮座の猿田彦神社があり、それに関するものと思われる。

SK04（Fig.20）

調査区の中央に位置し、SE01･SC02を切る。第１面で検出した。平面は0.8m×1.1mの楕円形を呈し、深さは15cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土である。土師器片が出土した。

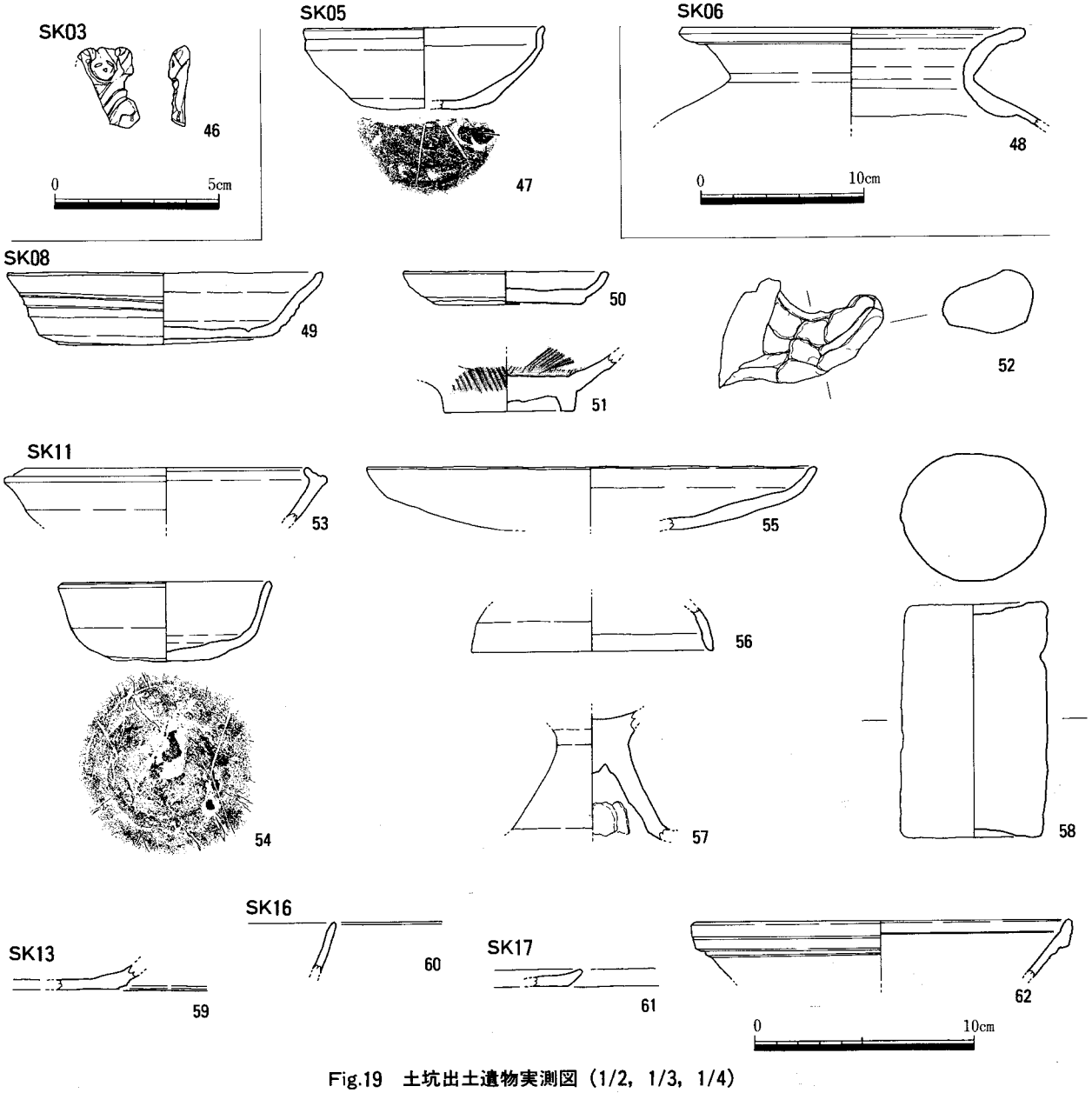


Fig.19　土坑出土遺物実測図（1/2, 1/3, 1/4）

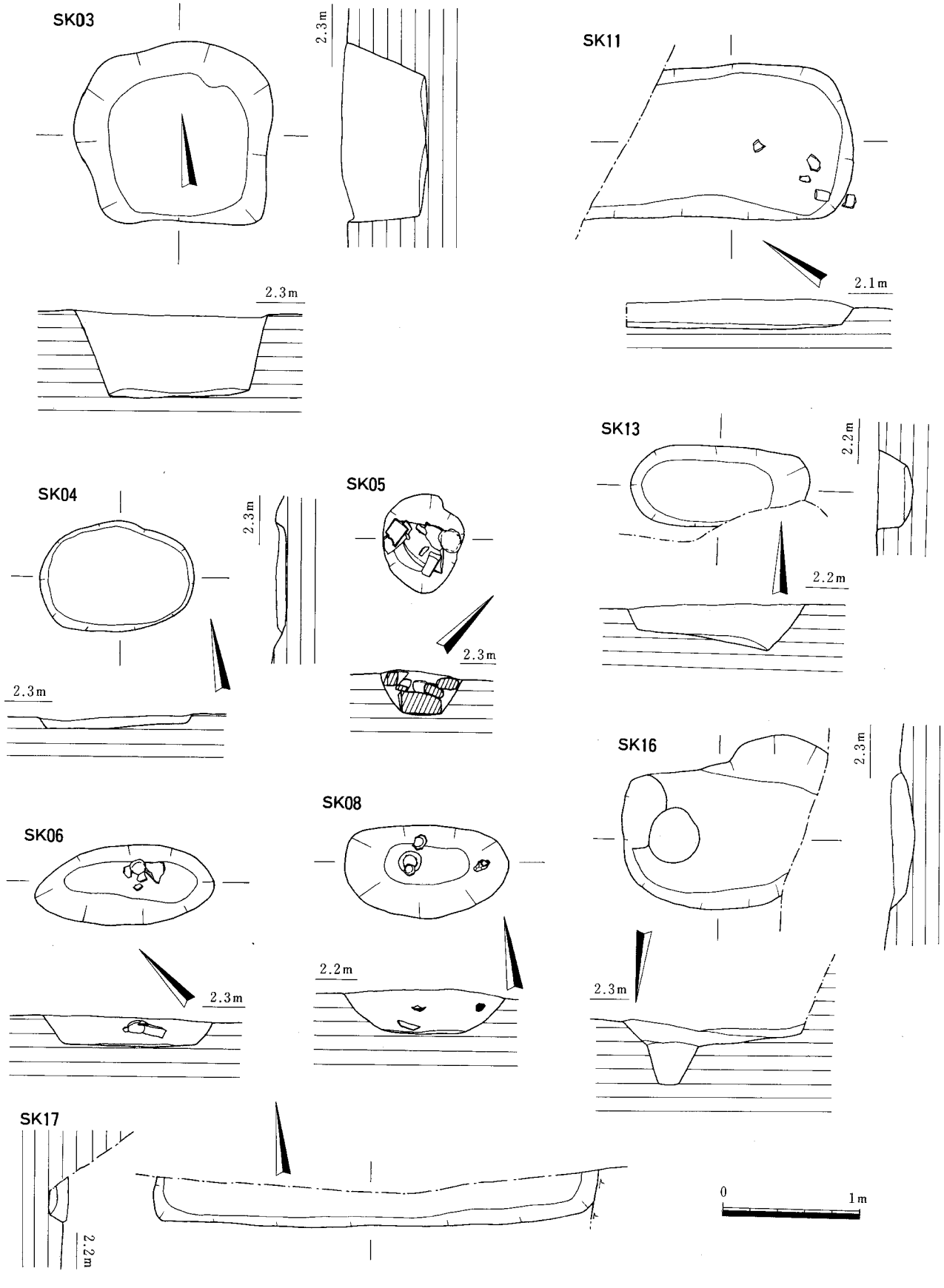


Fig.20　土坑実測図（1/40）

SK05（Fig.20、PL 7）

調査区の南西に位置し、第１面で検出した。平面プランは60cm×70cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。厚さ15cmの底石があり、その上にも石が乱雑に入る。石材は花崗岩であり、石の中には焼けたものもある。覆土は黒褐色砂質土である。須恵器片・土師器・陶磁器片が出土した。

出土遺物（Fig.19）

47は土師器の坏身で口径11.2cm、底径6.0cm、器高4.8cmを測る。口縁は外反し端部は丸くおさめている。胎土に金雲母を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。底部にヘラ記号がある。

SK06（Fig.20、PL 7）

調査区の南西に位置し、第１面で検出した。平面プランは0.58m×1.25mの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土は黒褐色砂質土である。中から花崗岩が２個、須恵器片・土師器片・不明鉄製品１点が出土した。

出土遺物（Fig.19）

48は須恵器甕の口縁部片で口径21.0cmを測る。外面は格子目叩きの後に横方向に部分的になでている。内面は同心円状の当て具痕が残る。ろくろの方向は時計回りである。

SK08（Fig.20、PL 7）

調査区の南東に位置し、第１面で検出した。平面プランは0.65m×1.2mの楕円形を呈し、深さは33cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土で、硬くしまっている。土師器・同安窯系青磁が出土している。

出土遺物（Fig.19、PL 9）

49は土師器の坏身である。口径は14.5cm～15.4cmとひずんでいる。底径は9.4cm、器高は3.3cmを測る。体部はやや外湾気味に開き口縁部は内湾している。体部外面には３条の沈線がある。底部には板目圧痕が残る。胎土に金雲母を含み、にぶい黄橙色を呈する。**50**は土師器皿で口径9.6cm、底径7.0cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切りで板目圧痕が残る。胎土には金雲母を多く含み、にぶい橙色を呈する。両方ともろくろの回転方向は反時計回りである。**51**は同安窯系青磁椀の底部片である。底径6.2cmを測る。体部外面にはヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れている。釉は部分的に垂れ下がっている。内面には櫛状の施文具とヘラ状の施文具により花文を施している。胎土はにぶい黄橙色を呈し、釉は緑黄色を呈する。**52**は把手で、胎土に金雲母・角閃石を多く含み、にぶい橙色を呈する。全面に指押さえ痕が残る。

SK11（Fig.20、PL 7）

調査区の北側に位置し、第１面で検出した。北側はSD10に切られているため、長さは不明だが、幅は1.1mを測る。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられる。深さは20cmを測り、底は平坦である。覆土は黒褐色砂質土である。浮いた状態であるが、土器がまとまって出土した。**58**は支脚と考えられる。SK11の南東側に40cm×55cmの楕円形プランを呈した厚さ６cm程の白色粘土を検出した。SK11の東側**SP46**には炭化物がまとまって出土した。これらの状況からSK11あるいはSK11の周辺には、かまどに関係する何らかの遺構があると考えられるが確認できなかった。須恵器・土師器・砥石片が出土した。

出土遺物（Fig.19、PL 9）

53は須恵器の坏身で口径14.8cmを測り、口縁にはかえりが付く。焼成が悪く、外面は灰色を、内面は灰白色を呈する。**54**は須恵器の坏身で口径9.8cm、器高3.7cmを測る。金雲母を多く含み、暗灰色を呈する。底部には×印のヘラ記号が２つある。**55**は土師器皿で口径20.8cmを測る。赤褐色粒を多く、金雲母・角閃石を少量含み、外面は浅黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する。**56**は土師器の坏蓋で、口

径11.2cmを測る。明赤褐色を呈する。**57**は土師器の高坏の脚部である。脚は外方に大きく開く。外面にはなで、内面にはしぼり痕・指押さえ痕が残る。橙色を呈する。**58**は土師器で断面は5.9cm×6.7cmとやや楕円形を呈し、高さは10.7cmを測る。内部は空洞ではなく、中実である。胎土は金雲母を含み、にぶい黄橙色を呈する。表面は丁寧ななで、一部指押さえを施す。両端は緩く窪んでいる。部分的に赤く焼けたような痕跡が見られるため、支脚ではないかと考える。

SK13 (Fig.20)

調査区の東側に位置し、第1面で検出した。平面プランは0.6m×1.3mの楕円形を呈し、深さは20cm～34cmを測る。底は東側に下がっている。覆土は暗茶褐色砂質土である。須恵器片・土師器片・白磁片・龍泉窯系青磁片・中国製青釉陶器片が出土している。

出土遺物 (Fig.19)

59は土師器坏の底部片である。胎土に金雲母を含み、外面は橙色、内面は黄橙色を呈する。

SK16 (Fig.20)

調査区の西側に位置し、第1面で検出した。西側は調査区外に延びる。平面プランは隅丸方形に近いと考えられる。東側に径40cm、深さ30cmの円形のピットを持つ。覆土は黒褐色砂質土である。須恵器片・土師器片が出土している。

出土遺物 (Fig.19)

60は須恵器椀の口縁部片である。口縁端部は丸くおさめている。灰色を呈する。

SK17 (Fig.20)

調査区の北東に位置し、第1面で検出した。遺構のほとんどが調査区外に延びているため明確なプランは不明である。深さは15cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土である。土師器片・白磁が出土している。

出土遺物 (Fig.19)

61は土師器皿で器高は0.8cmを測る。底部は糸切りである。金雲母を含み、にぶい橙色を呈する。**62**は白磁椀で玉縁口縁をもつ。口径17.4cmを測る。胎土は灰白色を呈し、釉は灰色を帯びた白色を呈する。

⑥包含層

包含層は表土の直下にあり、暗茶褐色を呈する砂層である。厚さは25cm～30cmを測る。調査区の全面に広がっており、ほぼ水平に堆積している。遺物は弥生土器片・須恵器・土師器・陶磁器・土錘・黒曜石製石鏃・砥石片・滑石片が出土している。また、時期の不明な鉄滓・鉄製品が出土している。

〈落ち込み状遺構〉

明確なプランが確認できず、底も凸凹を呈し、覆土も包含層と類似したものを落ち込み状遺構とする。 すべて第1面検出である。

SX12　調査区の中央に位置する。南側は検出できなかった。**70・76**が出土した。他に須恵器片・土師器片・陶磁器片・黒曜石小片が出土した。

SX14　調査区の北東に位置する。須恵器片・土師器片・陶磁器片・砥石片が出土した。

SX18　調査区の南東に位置する。須恵器片・土師器片が出土した。

SX19　調査区の南西に位置する。**65**が出土した。他に須恵器片・土師器片・砥石片が出土した。

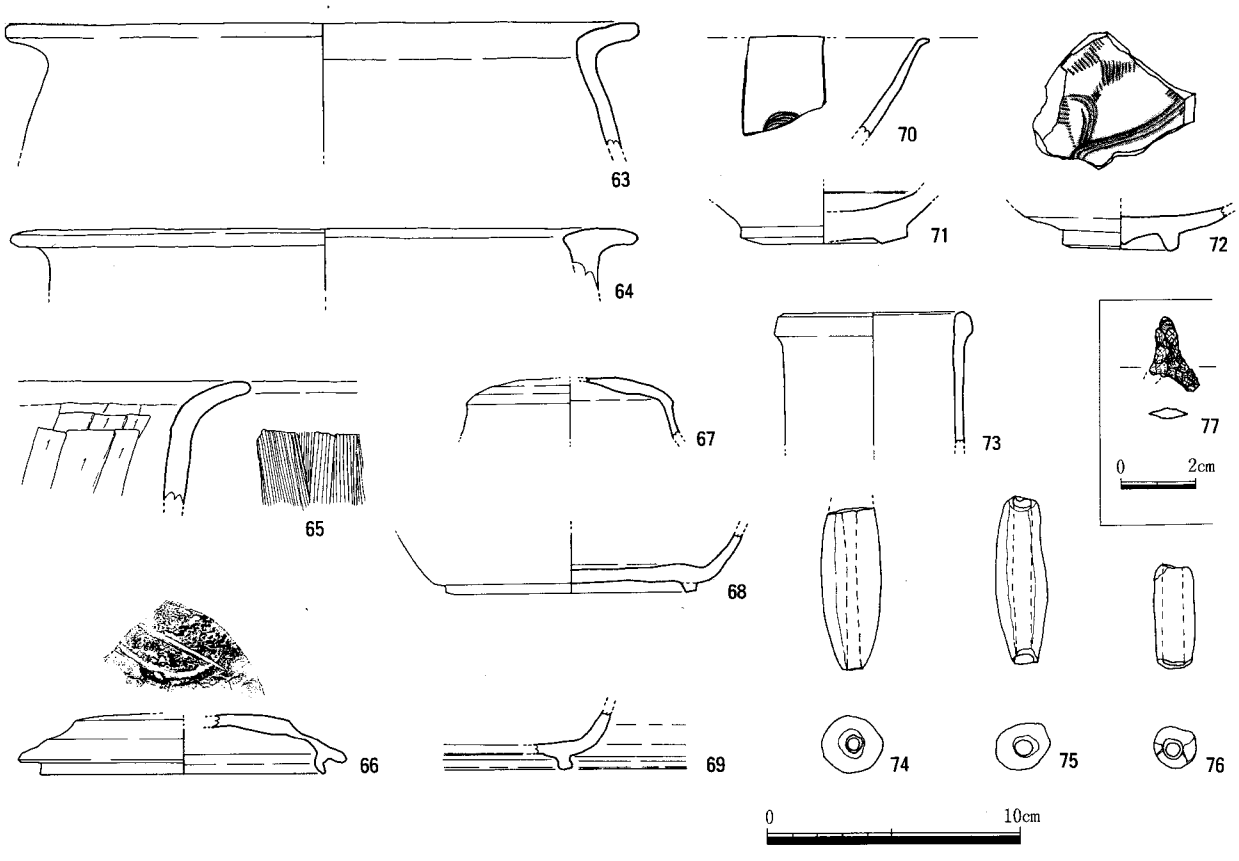


Fig.21　包含層出土遺物実測図（1/3，1/2）

出土遺物（Fig.21、PL 9）

63・64は弥生土器の甕の口縁部片である。**63**は口径25.0cmを測る。調整は表面が磨滅しているため不明である。赤褐色粒・金雲母を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。**64**は口径28.0cmを測る。調整は横なでである。胎土に赤褐色粒を多く含み、明赤褐色を呈する。**65**は土師器の甕の口縁部片である。体部外面は縦はけで、体部内面は縦方向のケズリで、口縁部は横なでで調整している。金雲母を含み、口縁部と外面は橙色、内面は赤褐色を呈する。**66・67**は須恵器の坏蓋である。**66**は口径11.2cm、現存高2.4cmを測る。口縁はかえりをもつ。灰色を呈する。天井部にヘラ記号をもつ。**67**は天井部をケズリ、他は回転なでで調整している。ろくろの回転方向は時計回りである。胎土には金雲母・赤褐色粒を多く含み、外面は橙色を、内面はにぶい黄橙色を呈する。**68・69**は須恵器で高台をもつ坏である。**68**は高台径9.9cmを測り、底部は糸切りである。回転なでで調整している。灰色を呈する。**69**は赤褐色粒を多く含み、にぶい赤褐色を呈する。**70・71**は白磁椀である。**70**は口縁部片で体部は内湾気味に開き、口縁は外反する。口縁端部は水平である。体部内面に櫛で花文を描いている。胎土は灰白色を呈し、釉は灰色を帯びた白色を呈する。**71**は底部片で底径6.6cmを測る。見込み部分に沈線状の段をもつ。外面には釉はかかっていない。胎土は浅黄色を呈し、釉は灰白色を呈する。**72**は同安窯系青磁椀の底部片である。底径は4.6cmを測る。外面体部下半には施釉されていない。見込みにはヘラ状の施文具・櫛状の施文具で花文を描いている。胎土は灰色を呈し、釉は緑灰色を呈する。**73**は褐釉陶器の壷の口縁部片である。胴部は欠損している。口径は9.2cmを測る。胎土は赤色を呈し、釉は褐色を呈する。**74～76**は管状土錘である。**74**は大型のもので一部欠損しているが現存長6.5cm、直径2.5cmを測る。全面丁寧になでている。端部は使用により磨滅している。胎土に赤褐色粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。重量31.38ｇである。**75**は全長6.8cm、直径2.0cmを測り、紡錘形を成す。両端は使用により

磨滅している。にぶい黄橙色を呈する。重量17.79ｇである。**76**は全長4.7㎝、直径1.6㎝を測り、円柱状を成す。両端は使用により磨滅している。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。重量10.09ｇである。**77**は黒曜石製の打製石鏃である。長さ1.9㎝を測り、脚部の一方が欠損している。側縁は脚部分で外方に折れ曲がっている。断面はレンズ状を呈する。

（４）まとめ

今回の調査では縄文時代から中世にかけての遺物が出土しているが、検出された遺構は主に古墳時代後期（６世紀後半）と中世（12世紀後半）の２時期に分けられる。古墳時代後期にはＳＣ02・ＳＢ09・SK05・SK06・SK11・SK16がある。中世にはSE02・SD10・SK04・SK08・SK13・SK17がある。

古墳時代後期の住居跡は甕棺墓群が形成されている砂丘より南では第９・15・18・21次調査、今回の第29次調査（ＳＣ02）で計５軒となる。時期は６世紀後半～７世紀の範疇で、第29次調査のＳＣ02は６世紀後半である。第18次調査ではかまどが確認されていないが、住居跡が調査区外に延びるため北側で検出される可能性もある。藤崎におけるこの時期の住居はかまどを付設していると考えられる。ＳＢ09はＳＣ02よりやや後出するが、他の調査区でも掘立柱建物が検出されていて、竪穴住居と掘立柱建物の関係が窺える。ただし、藤崎遺跡ではこれまで側柱建物しか検出されておらず、ＳＢ09の総柱建物は初めてである。また、土錘が多く出土していて、海浜に立地するという性格からも、漁撈を生業とする集落であったと考えられる。

中世の溝はこれまでの調査でも発見されている。規模と時期が違う２種類の溝がある。まず第８・10・11・12・14次調査で発見されている東西方向に走る、元寇防塁に関係すると思われる溝（①）である。13世紀中葉の時期が比定されている。幅は約３ｍ、深さは1.3ｍと考えられる。次に遺跡の南西側で多く見つかっている屋敷地の区画の溝（②）と考えられているものである。東西方向、南北方向に検出されているが、区画の明確なプランは確認できていない。時期は12世紀後半～13世紀初頭のものであり、時期は①よりやや先行する。また溝の規模も検出面の違いからばらつきが見られるが、幅（70～160㎝）・深さ（25～60㎝）ともに①より小さい。第29次調査で検出したSD10は規模・時期から②の屋敷地の区画の溝と考えられる。屋敷そのものは不明瞭であるが、この時期に伴うと考えられる井戸の検出数は増えてきている。第20・24・28・29次調査で検出されていて、おおまかに曲物・桶をつかうものと小礫をつかうものの２タイプに区分できる。区画の溝と井戸との関係はまだよく分かっていないが、北の砂丘後背のあたりから、南の低地あたりまでの範囲（Fig.３）に12世紀から13世紀にかけてかなりの規模で整地が行われ集落が築かれている。

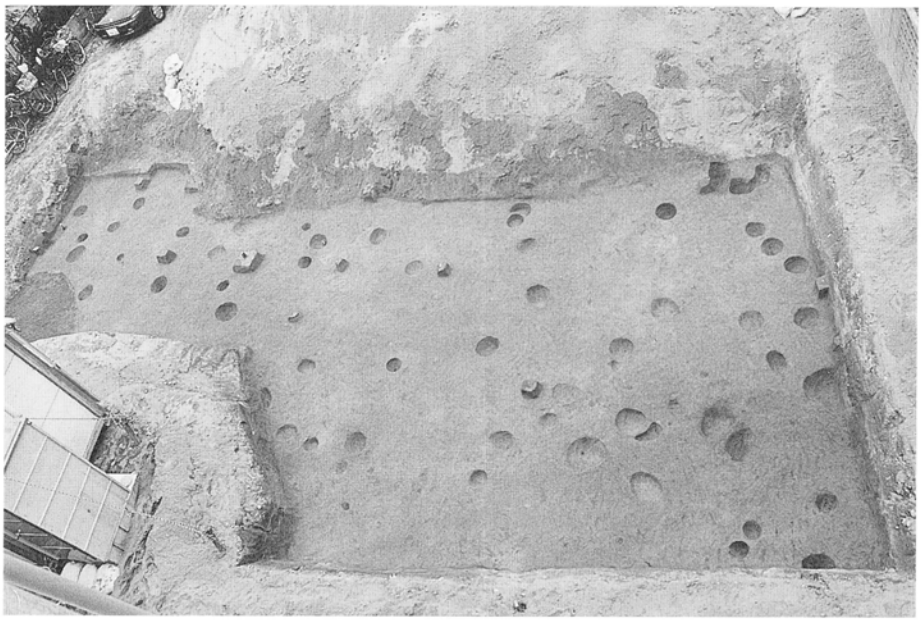
今回の調査で瓦がＳＤ10から出土している。これまでの調査では①の第８・11次調査地点から丸瓦・平瓦片が３点出土している。凸面は縄叩きの後なで成形しているものと、斜格子の叩き痕が残るもの、凹面はいずれも布目圧痕が残る。②の溝では第21次調査で平瓦細片が１点出土しているにすぎない。凸面は斜格子の叩き目、凹面は細かい布目が残る。第29次調査で出土した瓦の**41**～**44**はこの種類に入るが、１点のみ今回藤崎遺跡で別の種類のものが出土した。**45**がそれで、押圧文を施す軒平瓦と草花文を配した軒丸瓦とセット関係をなす平瓦である。特徴は胎土が須恵質で厚さが１㎝に満たず、凸面に縄目叩きがあることである。**45**は凸面に縄目叩きが残っていないがこれは粗く縦方向、横方向になでをおこなったため消えてしまったと考えられる。この瓦は博多湾を取り囲むように香椎Ａ遺跡・戸原麦尾遺跡・箱崎遺跡・博多遺跡群・鴻臚館跡・斜ヶ浦古窯、内陸に入って太宰府天満宮・西油山天福寺で見つかっているにすぎない（表紙参照）。砂丘という立地、出土量が極めて少ないため瓦葺建物を想定するには至らないが、供給地・消費地との関係など今後の調査に期待したい。

PL3

(1) 第1面南半分全景（東から）

(2) 第1面北半分全景（北から）

(1) 第2面南半分全景
（南から）

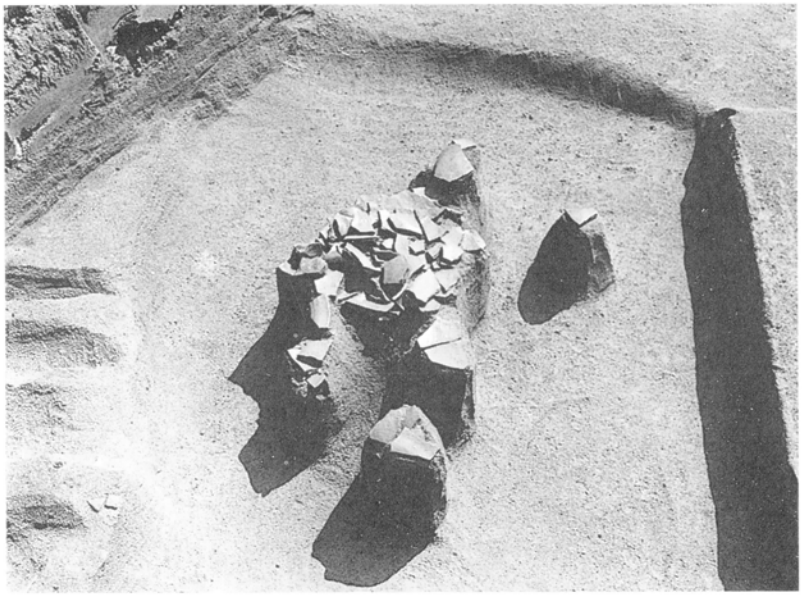


(2) 第2面北半分全景
（北から）

(3) SB09（東から）

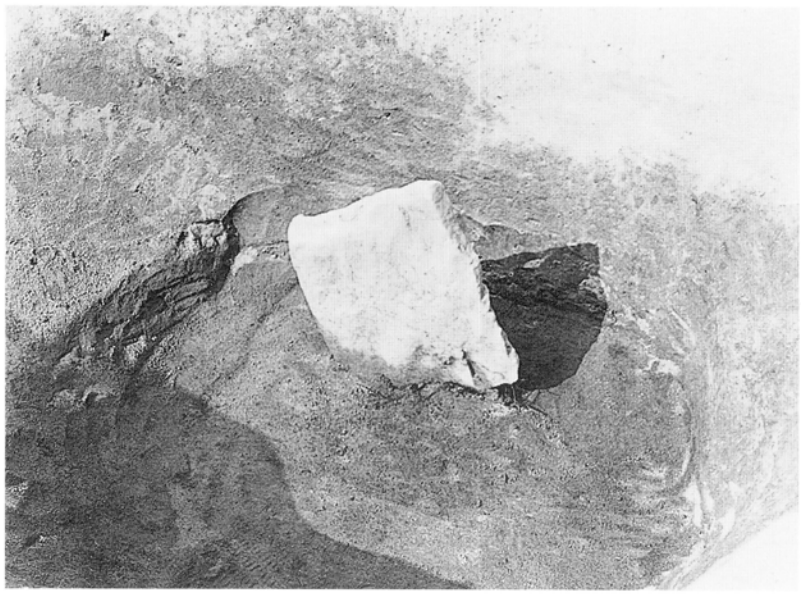
PL5

(1) SC02（東から）



(2) SC02遺物出土状況

(3) SD10（西から）



(1) SE01立石出土状況

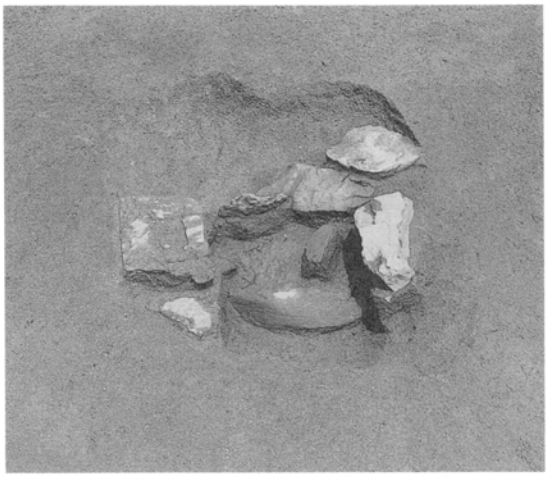
(2) SE01（東から）

(3) SE01井戸側出土状況

PL7

(1) SK03（南から）

(2) SK06（南から）

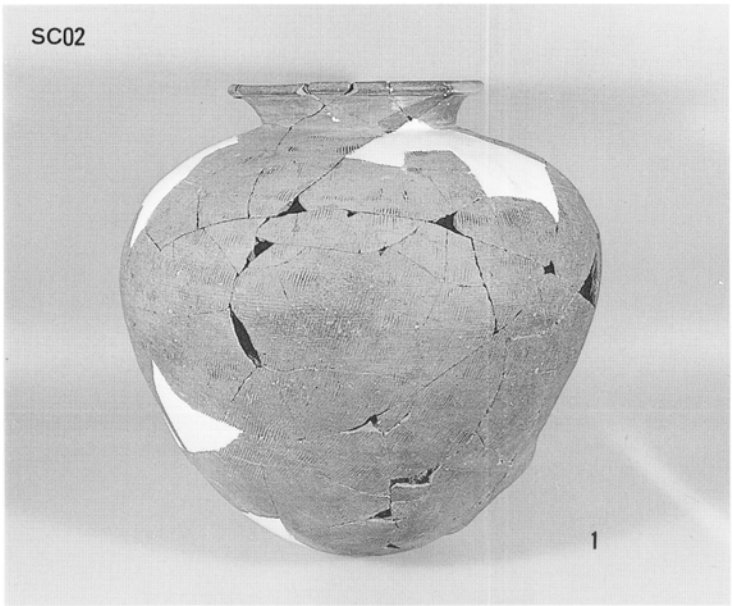


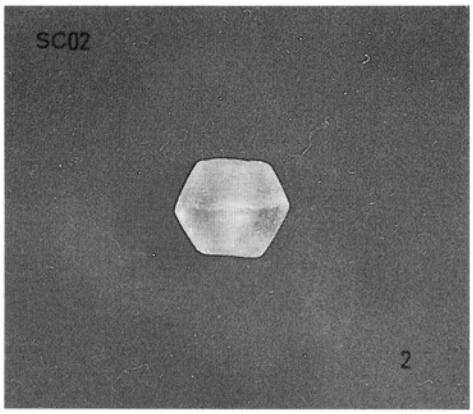
(3) SK05（西から）

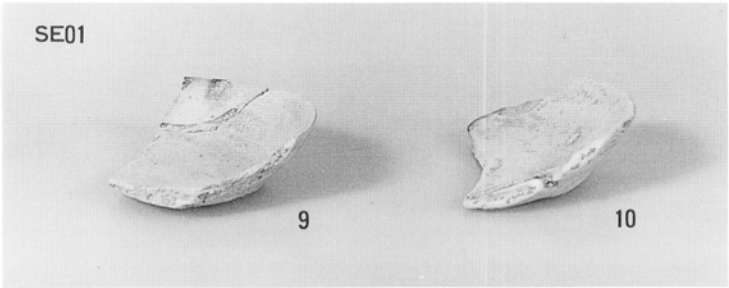
(4) SK08（南から）

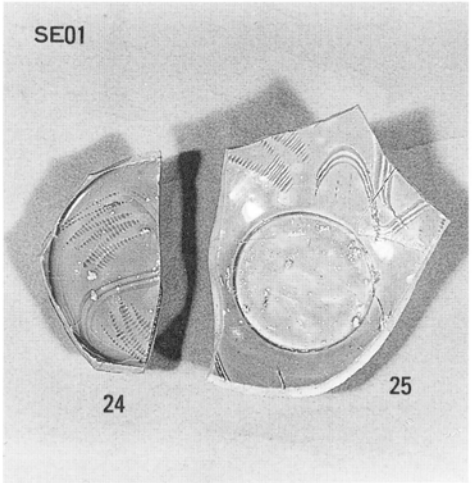
(5) SK11（北から）

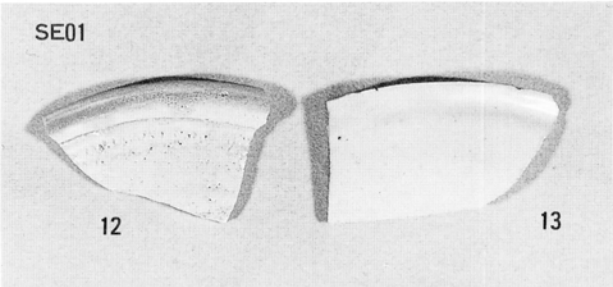
(6) SK11周辺遺物出土状況

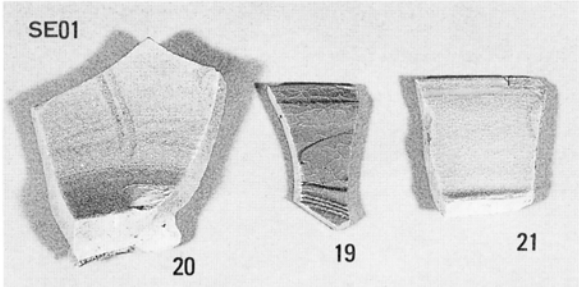


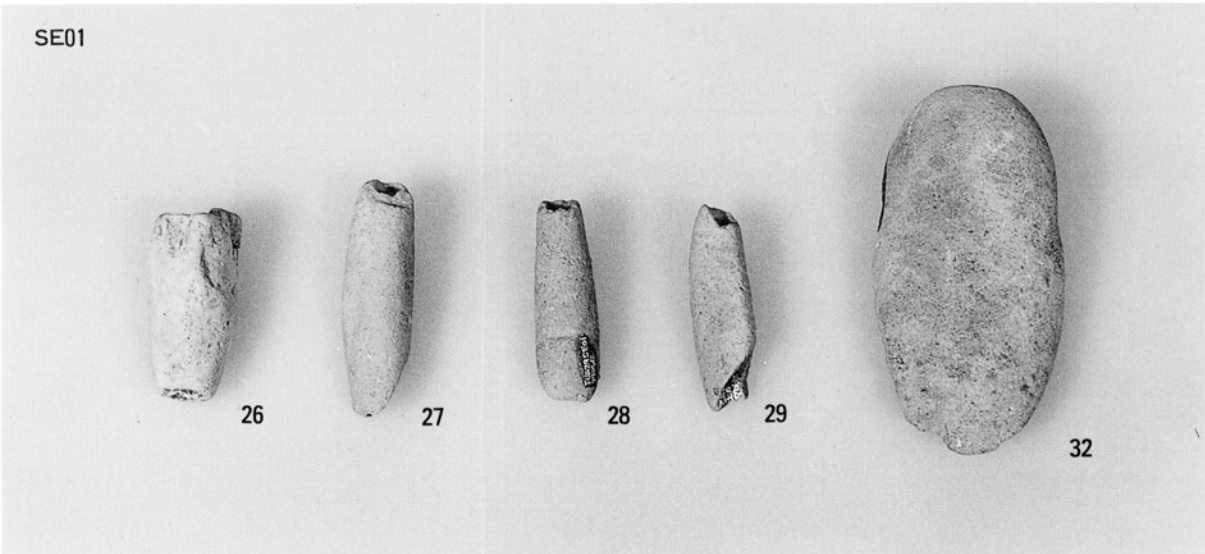






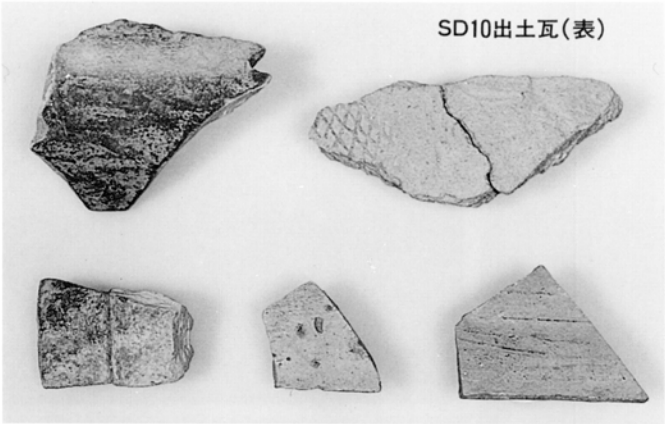


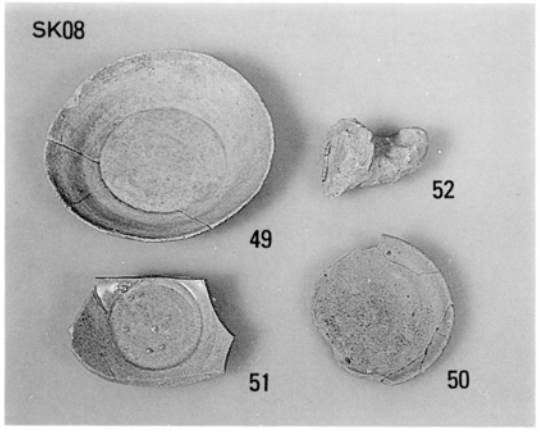


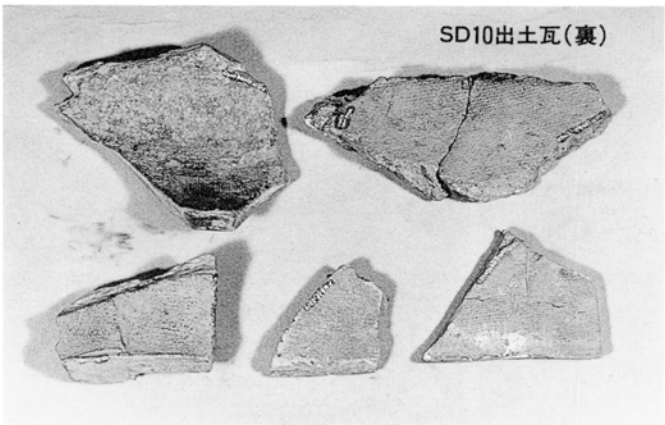


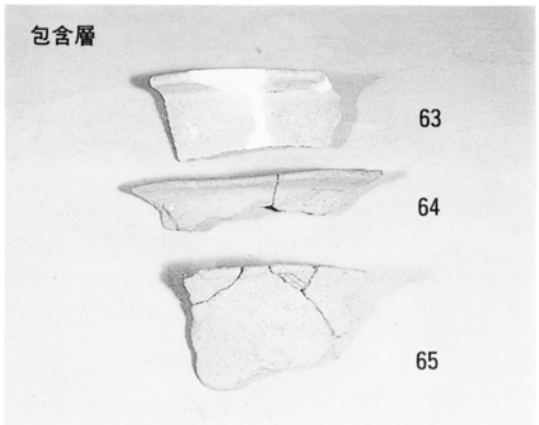
第29次調査遺物写真 1

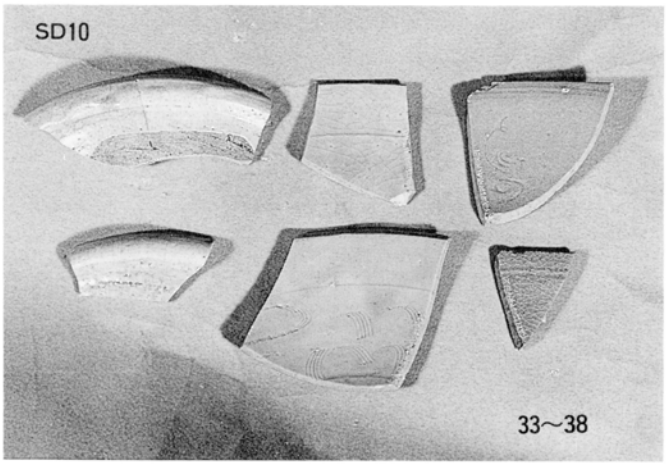
PL9

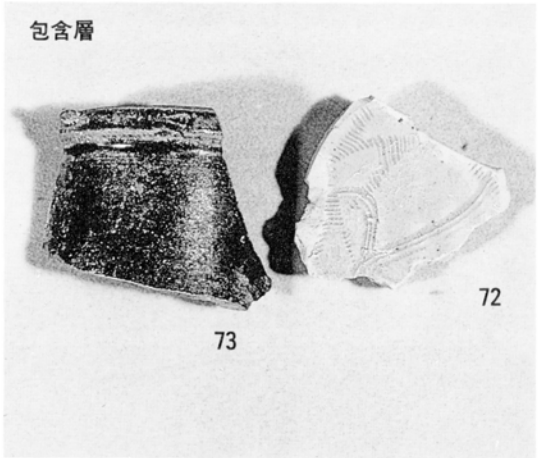


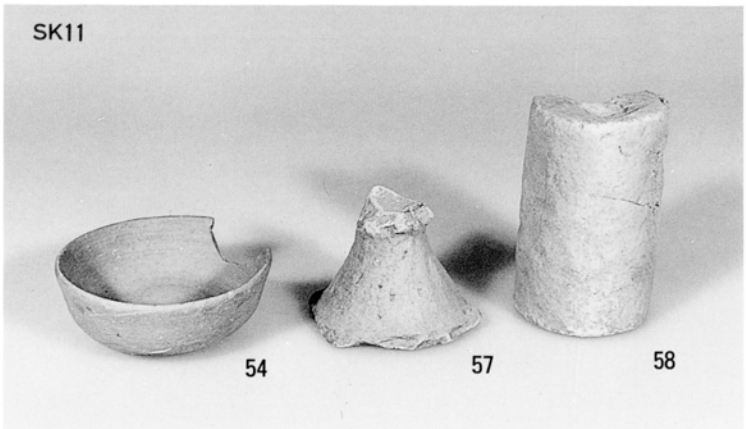


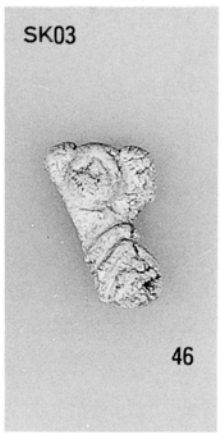












第29次調査遺物写真 2

藤崎遺跡14

福岡市埋蔵文化財調査報告書第607集

1999年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1

印刷　セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5－13